

都市環境デザイン会議

東京都文京区本郷2-35-10
本郷瀬川ビル TEL113-0033

TELEPHONE 03-3812-6664
FACSIMILE 03-3812-6828

JUDI

078

20.MAY
2004

特集 水辺のまち 一自然の力と市民力一

発行者:都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

●特集:水辺のまちー自然の力と市民力ー	1
1. 松江・出雲特集	2
2. 水辺のまちー自然の力と市民力ー	4
3. 「斐伊川くらぶ」の活動	6
4. 出雲平田の街並み「木綿街道のまちづくり」	10
5. 出雲今市・高瀬川沿いのまちづくり	13
6. 暮らしのなかの資源を活かした 都市観光	15
7. 堀川の新しい祭りを!	17
8. 元遊郭「米江旅館」での三人展	19
●JUDI作品発表会'04	29
●ブロック例会報告	30
●事務局より	30

特集:水辺のまち ー自然の力と市民力ー

松江・出雲特集

井ノ上知子

まつえ・まちづくり塾代表

今回の「松江・出雲特集」では、「水」の自然性を「人の暮らし」に引き寄せた構成となっている。

近世になっての堀割や水路は、現在では当初の目的とは異なりながら、各々のまちの「都市環境デザイン」の基軸としての役割を果している。歴史的な資産はもとより、流れ動きのある「水」の表情そのものが、「まちづくり」に多くの示唆を与えてくれるのである。

古代にさかのぼると、ヤマタノオロチ神話には斐伊川の洪水や治水事業との関連がうかがえ、また、国引き神話は中国山地と島根半島を結ぶ低湿地帯の地形の変遷を語っているとも思える。

松江市の中心部の宍道湖には、早朝「シジミ舟」が浮かぶ。産業としてのシジミ漁でありながら、湖上に規則正しく浮かぶ無数の黒いシルエットは、松江の都市景観を印象づけるものもある。シジミ漁を始め、宍道湖での様々な漁は生態系の保全とも一致し、結果的に良好な水辺景観につながることを示している。

宍道湖は、中国山地に源を発する斐伊川の下流となる。今回の特集では、斐伊川の上流域と下流域に暮らす人たちを結ぶ「NPO法人 斐伊川くらぶ」の活動の様子を寄せていただいた。この地方の暮らしの基本には斐伊川、宍道湖、中海と続く水系が大きな役割を担っていることを理解したい。

松江・出雲のまちは、「歴史的資産」が現在にゆったりと生きている。出雲弁で「おんばら」と「おっちら」とつくられたまちや人々の暮らしのなかに、光る要素が多く隠されているのである。当たり前であったことが、実はとても大切なことに気づかされる。そのようなことを考えながら「水辺のまちー自然の力と市民力ー」を特集のテーマとした。

一水辺のまちー 自然の力と市民 力

寺本和雄

樹寺本建築・都市研究所

ここでとりあげた平田（船川）、出雲今市（高瀬川）、松江（堀川）という島根県東部の3つのまちは、近世になって開削された人工の水路沿いのまちである。舟運はすたれたものの、水辺沿いには古い町屋や倉、石積護岸などが歴史物資として残されている。

稻佐の浜ー出雲平野ー宍道湖ー中海ー弓ヶ浜半島と西から東へ続く低湿地帯は早くから開けた古代出雲文化の中心地でもある。

この地域の水辺の特徴は、日本海・中海の干満差が少ないため、水面の高さが地面に近く、親しみ易いということになるが、水害にも遭い易いということでもある。

昭和39年の斐伊川の水害を契機に下記のような治水計画が策定された。

上流ー斐伊川の上流に、2つのダムをつくる。

中流ー斐伊川と神戸川を放水路で結び、斐伊川の水を神戸川を通して日本海へ流す。

下流ー宍道湖から大橋川への呑み口を広げるとともに、大橋川をしゅんせつし、中海へ流れやすくする。

このうち、上流と中流の事業はほぼ目度がたち、現在は下流の事業が大きく論議されている。

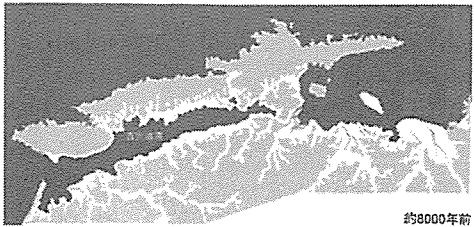
大橋川の拡幅は水都松江の骨格に関わる事業であり、市民の知恵と行動力が試されているともいえる。

斐伊川

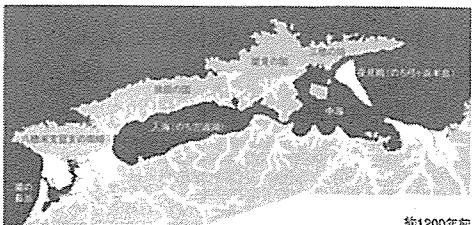
中国山地から出雲平野を経て宍道湖に注ぐ。流長75.2km、流域面積923.9km²。出雲神話、スサノオノミコトの「八岐大蛇」で知られている。かつては、「肥河」とも「簸川」とも「出雲大川」とも呼ばれた。江戸初期までは出雲平野を西流して日本海へ通じていたが、寛永年間には現在のように東流し、宍道湖に注ぐようになった。

宍道湖の洪水の歴史が多い。斐伊川の上流が風化した花崗岩地帯であることや、この中に含まれる砂鉄を採取し、鉄を生産するために行なわれた鉄穴流しによって、大量の土砂が流下し、下流部では天井川を形成したことが原因と考えられる。

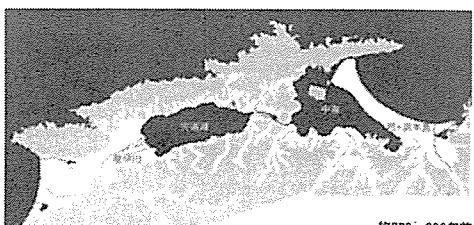
出雲地方の地形変遷の様子(地図データ作成/島根大学
汽水地研究センター)



約8000年前

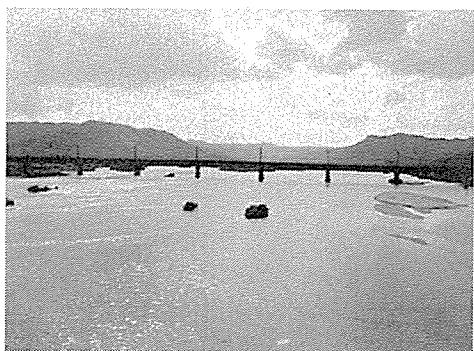


約1200年前



約200~300年前

度重なる洪水の結果、斐伊川は流路をかえ、現在のように宍道湖に注ぐようになる。



斐伊川

平田船川

資料によると室町時代の末期に、開削・改修が行なわれたらしい。流長は約11.4kmで宍道湖に注いでいる。

河川沿岸には、平田と布崎の港があり、松江、美保関方面とを結ぶ宍道湖北航路の一部であり、中海を経て外海に出、大阪など近畿一円にまで商いを行なうものもあった。現在、治水事業に伴う、各種の整備事業が進行中である。



船川

出雲今市一高瀬川

江戸初期（1687年）大社町荒木浜開拓地の灌漑用水を得るために開削された。斐伊川から取水し、大社町の堀川を経て日本海に注ぐ。川幅4間、現在は延長約8kmの疎水である。その構築にあたっては水門の築造、水漏れを防ぐ工法など当時の土木測量技術が駆使されている。

農業用水としての機能にとどまらず、戦前までは舟運にも利用された。川を上の高瀬舟の絵を地誌「出雲鏡」の中に見ることができる。現在も、生活用水や防火用水としての役目を果たしている。



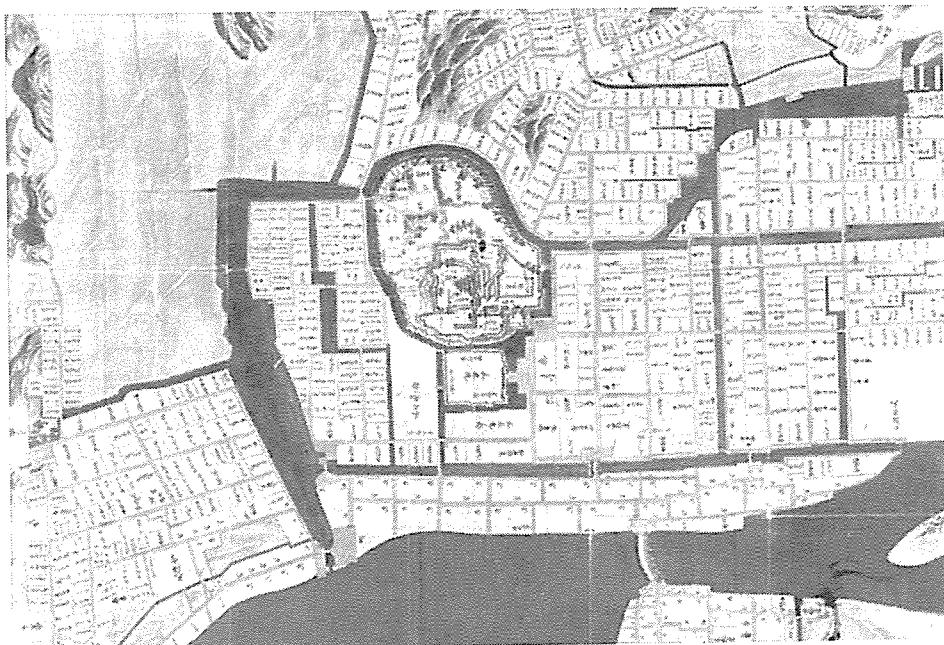
堀川遊覧の概要

- ・コース全長 3.7km
- ・就航船 40隻（うちソーラー船1隻）
- ・乗船客 約34万人／年
- ・就航日 通年
- ・船頭 95名（うち女性12名）

平均年齢 63歳（50歳～70歳）

松江堀川

江戸初期（1604年）、松江城築の際に、内堀・外堀として開削された人工の水路の総称であり、宍道湖とともに水都松江のシンボルとなっている。全国各地の城下町と比較して堀の保存状態は良好であり、平成9年から遊覧船が就航している。



延享年間松江城下之図

「斐伊川くらぶ」の 活動

小谷 武

NPO 法人 斐伊川流域環境ネットワーク

私達の生活に欠かすことのできない水は、太古の昔から斐伊川の恵みを受けて、今日の発展と人々の幸せをもたらしてきました。水は生命の源であり、これを育むのが森です。そして、その環境を良くするのも悪くするのも人次第です。

近年斐伊川とその流域は、護岸改修、干拓、雑排水流入等、人間の生活活動や経済活動を優先した結果、急激な水環境変化を招き、水質悪化や生態系異変が生じています。

このような状況を開拓するための水環境保全や復元等による諸施策の実行が急がれます。

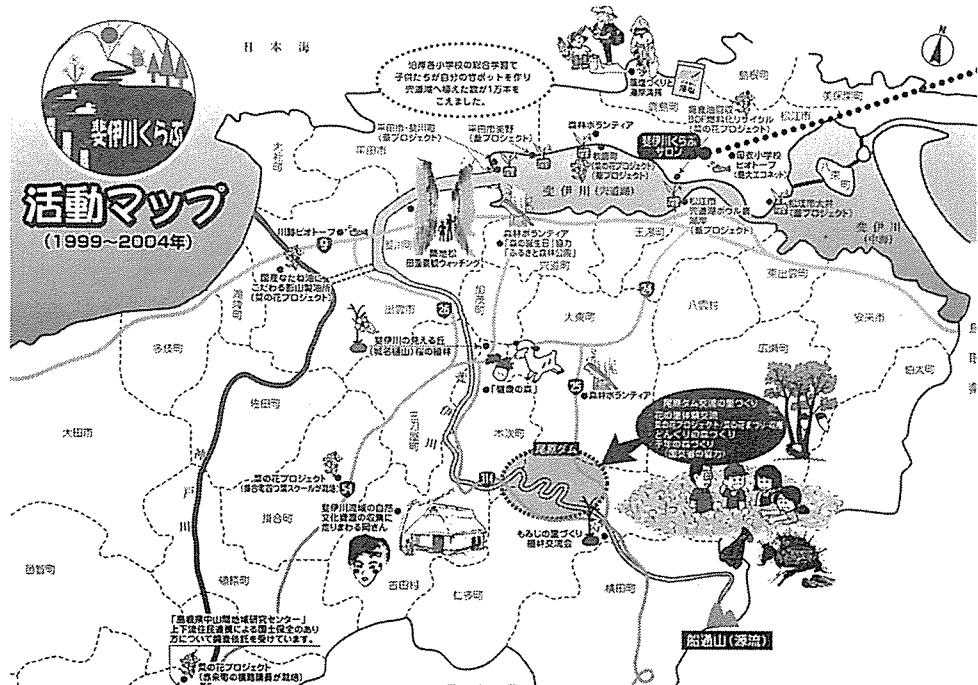
現在、斐伊川下流域の治水対策と都市化による水需要増加対策のため、上流部（木次町、仁多町）に大規模な多目的ダム「尾原ダム」が建設されています。元来、斐伊川下流地域は水資源が乏しく、増加しつづける水需要に応えていくためには斐伊川の水に頼らざるを得ません。しかし、斐伊川は急流のため、安定的に取水するダムの建設が必要です。したがって「尾原ダム」は、流域全体の暮らしにとって貴重な「水ガメ」なのです。

ダムが建設される上流地域の木次町、仁

多町では、下流域の利水や治水といった公益性によって、合わせて 360ha の農地を失い、111 戸の人々が移転を余儀なくされました。結果として、多くの方が生まれ育った故郷を失い、多大な犠牲の上に「尾原ダム」が建設されるわけです。このような現状を考えると水の恩恵を受ける下流域の住民がなによりも上流域の状況を認識して、上流域の住民に対し、支援や協力をする必要があります。また、一歩も二歩も踏み込んで国土を保全し、自然環境を保全している中山間地域の農林業の実態にも目を向けて、より深い理解をする必要があります。

現在、私たち「NPO 法人斐伊川流域環境ネットワーク（斐伊川くらぶ）」では、将来担う子供達を交え、上流域住民と下流域住民の交流、連携に取り組んでいます。この活動が上流域(中山間地域)の交流人口を増やし、一人でも多くの理解と協力者を得て、住民主導の流域連携によって中山間地域活性化が実現出来ればと考えています。

私たちは、この活動の持続的かつ広範な連携を図るために、行政および多様な主体と協働して活動を展開しています。活動の内容は下記のとおりです。



①宍道湖ヨシ再生プロジェクト

貴重な地域資源である宍道湖の水質浄化と健全な水生動植物の生態系を取り戻すため、産、官、学、民が協働して竹ポットによるヨシの植栽活動を広域的かつ長期的に行い、宍道湖が有する豊かな恵みを取り戻すため、特に次世代を担う小学生を中心に活動を行っています。



宍道湖ヨシ再生プロジェクト

②尾原ダム・交流の里づくり

木次町、仁多町の尾原ダム建設予定地を上下流交流の拠点とし、多彩な交流活動を行っています。

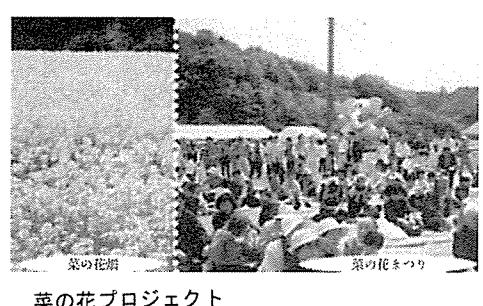


尾原ダム・交流の里作り

③どんぐりの森づくり

尾原ダム建設によって削られる山肌の緑を復元するため、流域の小学生が集めたどんぐりと竹ポットを使って流域の山々に上下流住民が協力して植林を行い、緑の大切さを実感できる

環境教育の場として活動を行っています。



菜の花プロジェクト

④菜の花プロジェクト

1) 斐伊川流域の休耕田に遺伝子組換えのないナタネを植えて景観作りと農地の有効活用を図ります。

2) 取れた種子から安全な地元産の食用油をつくります。

3) 廃食用油は集めて B.D.F 燃料としてリサイクルしています。松江市では既にこの燃料による車が活動しています。

4) ナタネの栽培について

地元農業者、地元製油業者、自治体、斐伊川くらぶが連携してナタネの栽培や学習会などに取り組んでいます。



森林環境体験活動

⑤森林環境体験活動

上流の森林荒廃の現状を知るとともに、国土の保全のために活動できる人を養成しボランティアの機会を提供するとともに、上流域の人々との顔の見える連携を子供も含めて

進めています。

出雲平田の街並み「木綿街道のまちづくり」

伊藤幹郎

出雲市役所

■ 雲州平田の歴史

平田に関する記述は、出雲風土記（733年、奈良時代）に豊かな水のあるところ「爾多郷（エタノサト）」と説明され、「沼田郷（エタノサト）」として出ている。平田の地名は、現在のところ鎌倉時代（1,249年）の出雲大社の「杵築大社造営所注進」の中に「平田保（ヒタノホ）」としてでているのが最初である。

平田の町は、鎌倉時代末期頃、近江商人によって開拓され、以降在郷の商人の町として、街並みが形成された。坪内家文書（1,569年）には、平田目代（商人の頭）の連署書状があり、書面からは、当時の商人の活発な活動が、生き生きと感じられる。室町時代の末期ごろには、平田屋佐渡守（広島の町も平田の後に設計した）による都市計画で、河川の開削を行い河川交通の利便がはかられ、平田の商人の中には、宍道湖から中海を経て外海に出、大阪を含めた近畿一円にまで商いを行うものもあった。また、現在でも防御用の「鉤の手辻」の道路が残っているのも、この頃の計画の名残と思われる。

江戸時代に松江が城下町として栄えたが、平田は、それに続く大きな町（在郷町）として、17世紀半ばには、町の形態を整え、農村地域の消費を背景として繁栄した。貞享3年（1685年）の斐伊川の大洪水を経験し、河道の改修がされ、埋め立てや河道後の耕地利用など新田の開発が進められた。また、松江藩侯が出雲大社に参詣する際に泊まった旧本陣（木佐本陣、儀間家本陣）が設けられている。

当時松江藩の主たる収入源は、米であり、これについて原手の綿花、山手の砂鉄が重要であった。江戸時代中期（1,788年、木佐家文書）には、郡内に5軒の大きな酒屋があった。また、この頃から、大阪で声価を得た「平田木綿」の集散地としても賑わうと同時に、木綿業を中心とした商人等による文化の全盛時代を迎えていた。

明治時代になると綿花に代わり、養蚕業を土台とした製糸業が発達し、明治末には生糸の町として、県下第一の工業都市として栄えた。

現在の平田町は、小売商を中心で、その意味では、江戸時代のこの町の性格は、現在でも失われていない。地方的商業町の性格を物語っているが、一方で、車社会の到来と多様化の波とともに、購買力も松江、出雲方面へ吸収される傾向にある。しかし、最近では、地域の持つ潜在的な魅力を地域の手で、産業の活性化や中心市街地の整備への取り組みが、始められつつある。

■ 切妻妻入り塗り壁造り

平田町地錢帳（1,691年）には、本町89軒、新町80軒と記載されており、17世紀半ばに町としての形態をもっていたことがわかる。平田町の家屋は、市場町に多く見られる「切妻妻入り塗り壁造り」である。屋敷地は、延宝9年の平田町地錢帳に示されており、間口3間、奥行17間となっていて、本来松江藩が定めた町人一軒の間口6軒の半分を一軒分としていることから、農民を対象とする零細な小間物商が多いことが関係していると考えられる。このため、通り庭一列間取りの町屋が形成され、妻入りとなる傾向が多く、通り庭は、本町通りでは、ほぼ南側に一定していた。

30年前までは、市場、本町通りには、往時を象徴する「切妻妻入り塗り壁造り」の商家群が数百メートにわたり連なり、旧本陣とともにこれが現存していれば、歴史的に貴重な景観であったが、道路拡張によりこれがなくなったのは、残念である。

しかし、幸いに、これから外れた宮の町、片原町、新町地区等には、伝統的な建物が残っている。

また、家屋が道路に対し、ある角度を持っているものがある。角度は、5度から40度まであり、宮之町・片原町等で見られる。その理由は、旧地割と河川の付け替えのためである。このため、家屋の下屋部分が斜めになることがしばしば見られるのが特徴である。



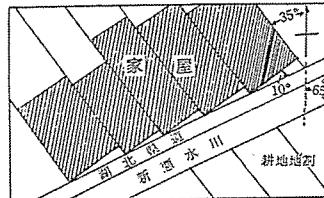
平田木綿街道（新町）の歴史的街並み



石橋酒造立面図（新町）※1



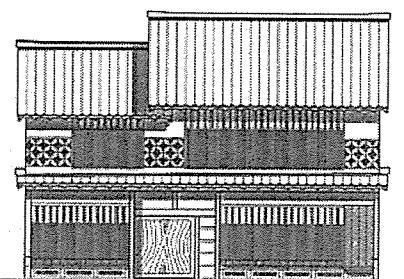
妻入り土蔵造りと斜接する下屋（片原町）



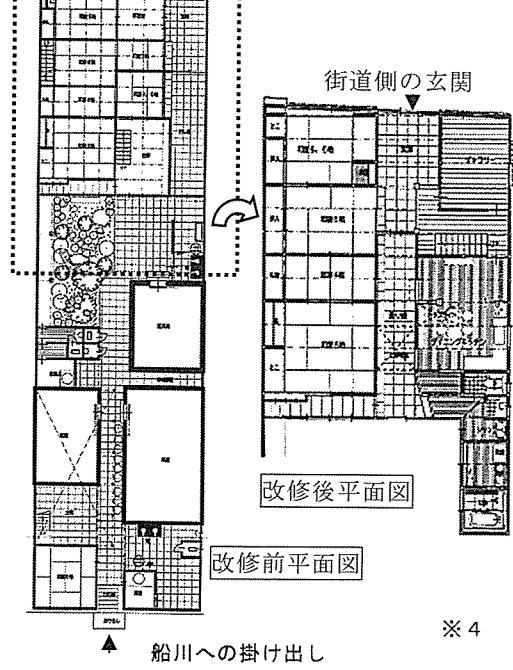
※2

※1 石川建築設計事務所
代表石川良一（平田）氏作成

藤岡大拙氏講演
「平田の歴史」資料参照
※2 平田市誌より



小村邸改修後立面図



※4

■船川と町の景観

片原町は、船川に面する水辺の空間が極めて特徴的である。「掛け出し(カケダシ)」と呼ばれる河面に張り出した足場、洗濯場や船乗場となる空間がある。この掛け出しへ、「出しの小路」などの名前がついた「小路」と呼ばれる路地の延長の階段先にあるものと商家の個人所有のものがある。

船川は、宍道湖と直結しており、たびたび水位の上昇による水害を受けており、現在下流から改修されてきている。宮之町・片原町・新町の裏手を流れる船川は、その整備にあたっては、水辺の空間と建築物との調整を極めて注意深く検討し、設計をする必要がある。

また、この船川沿いの土手には、桜並木があり、見事な風景を保っていた。今年になって切られ、現在は数本の桜の古木が残るのみである。また、この船川には、明治大正時代から昭和のはじめ頃まで、船舶の停留場、跳ね橋もあり、往時を誇っていた。

現在進められている河川改修と都市計画街路の整備は、必要ではあるが、合わせて多面的な生活者の視点も必要である。特に、新町の都市計画道路は、街並みの再生活用のあり方を十分に議論した上で、考えるべきである。河川とともに橋と橋詰めの空間は、町の顔となるところであり、十分な検討が必要であろう。

■街並み再生への取り組み

宮之町の小村邸は、商家であり、明治時代は、河川交通を利用した塩の専売をしていたことから、裏の船着場の掛け出しから、母屋までの見事な土蔵棟の配列がみられる。

この建物の改築は、地元の建築家である石川良一氏が担当され、第9回しまね景観賞（平成13年度）を受賞されたものである。母屋は、明治10年代後半に新築されたもので、外壁の海鼠壁の七宝模様は、現代の左官技術では、再現が難しいと思われ、また、檜の格子は、釘を一本も使うことなく、大工の技術だけで製作されたものである。屋根は、平入り切妻塗壁造り2段屋根であり、これは使用人部屋（借家）と母屋の2棟が合築されていて、また隣家との立地に關係したものと思われる。

施主の英断で、改修された建物であるが、基礎や筋交いの補強で耐震性を高め、人の体や環境にやさしい住まいとして、見事に再生している。街並み保全は、そこに生活する人の生活様式の変化や車庫のニーズ、コスト問題を含め、必ず解決の糸口はあり、専門家の関わりが極めて重要である。

※3 「写真で見る平田市の歩み」より

※4 石川良一氏作成

■木綿街道のイベントとまちづくり

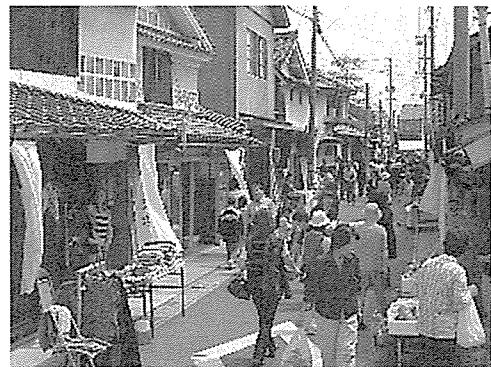
現在残っている街並みも毎年数件ずつ少なくなつて行く現状に危機意識を持って、街並みを調査して保存を呼びかけるグループとして、平成10年3月に「雲州平田町なみの会」が結成された。平田の良さを再発見しつつ、新しい街づくりを考え、誇りと潤いのある町を市民サイドから提案することを目的として、平田船川や商家を調べ、「切妻土蔵造りの商家群の町;なみ便り(波のような活動という意味)」を発行するなどの活動をしている。特に、平田大橋の改修の際に平田船川の復権のため、何とかしたいという思いもあり、活動をされた経緯もある。一方で、木綿にこだわったイベントをするグループが生まれた。

この二つのグループが一つになり、平成13年3月に「川並み・町並み再発見、おちらと木綿街道」のイベント、川並み・町並みボランティアガイドの募集を行われ、「木綿街道実行委員会」(代表:来間屋生姜糖社長の来間久)として、活動の体制が整えられた。

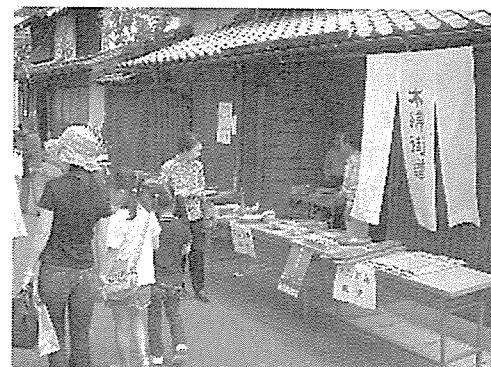
この活動には、景観の保全や行政に対する要望的な街並みの保存と街づくりの提案に留まらず、この街並みを地域資源として活用し、商業の活性化、新産業の創出などに試行的に取り組み、経済の振興に寄与したいという趣旨がある。何よりも自らが楽しみ、お年寄りから子供まで多くの人々に理解をしてもらうため、講演会や写生大会、見学会、平田天神祭り(宇美神社)の一式飾りへの参加、そして年一度である「木綿街道イベント」など様々な活動をしている。

今年の「平田木綿街道イベント」は、宮之町・片原町・新町を中心に、快晴のもと平成16年5月23日(日)に行われ、大勢の人で賑わった。普段ひっそりと息を潜めている街が、この日1日は、軒に吊された木綿の暖簾や色使いのある布で統一的に演出され、ハレの空間になった。

店舗は、道に面して出店を出し、路上にはフリーマーケット、軒先には椅子を並べ、会話の弾むやさしい空間が現れた。普段がらんとして、寂しさが目立つような倉庫も、



木綿街道イベントで賑わう町(片原町)



木綿街道の暖簾と醤油醸造前の出店



※5都市計画図より作成

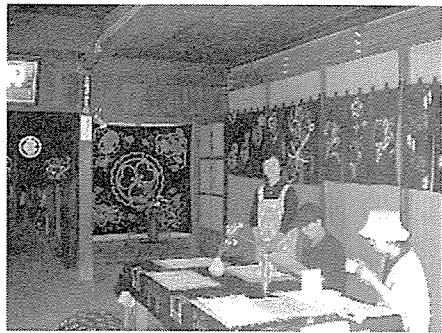
少しの布と展示や椅子机で、蕎麦屋さんのお店に早代わり。民家も玄関を開放し、絵や花や俳句を展示。表具屋さんは、粋なディスプレイ。江戸時代につくられた瀟洒な土蔵造りの室がある麹屋さんは、お店の中を藍染めと焼き物で演出。平田名物の生姜糖屋さんには、車椅子に乗って高齢の皆さんのが懐かしそうに、お茶をのみながら語らう。船川に面する建物は、一階の座敷を開放し、納涼場のようなお酒の飲めるレストランに。二階は、酒造りの過程を見せる貴重なミニチュアの彫刻など酒造りに関する展示。船川の掛け出しからは、ボートの遊覧。造酒屋、醤油屋さんはじめとするお店は、即日販売とともに、お店を開放し、店の歴史を展示・解説。店先では、どぶろく饅頭などの実演販売。空き地では、ゲームや屋台の出店。そこには、はじめて訪れた人と、近所の人が、自然に交流できる空間が、出現していた。

特に、持田酒造の倉庫や工場の一部を開放してできた即席の講演会場は、木造の高い天井と剥き出しの機械が見え、酒の甘酸っぱい香りの中で、何ともいい得ない心地よさが印象に残った。島根女子短期大学の藤岡大拙(フジオカダヒツ)先生の講演「平田の歴史を語る」にふさわしいイベント空間となつた。会場に設置された畳2帖もあるパッチワークでできた街並みを描いたタペストリーは、藍染めの布の色合いや構成センスの良さはもとより、街を愛する女性達の思いで溢れていた。

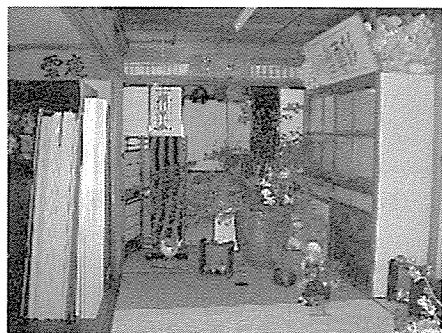
新町にある石橋邸の建物の印象的なファサードや、今回は公開されていなかつたが、すばらしい出雲風庭園など、地域にはまだまだ貴重な文化的財産が多くある。伝統的建造物群保存地区を目指す努力も必要であろう。この地区と船川を含む対岸のエリアは、保全・修景整備について、地域の人々、行政を含めて、多くの専門的示唆を得る必要がある。地域の課題解決に向けて、街の活性化を強く願うところである。



石橋邸のファサード(新町)



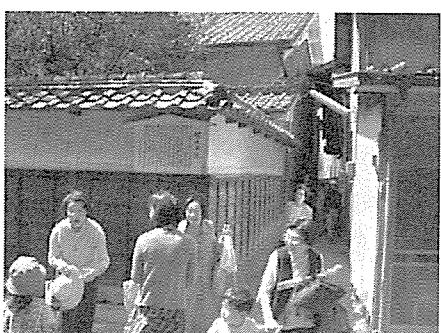
麹屋さんの藍染めの展示



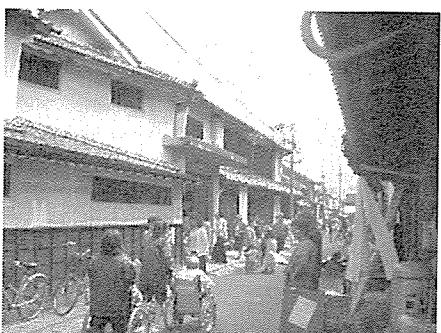
表具屋さんのディスプレイ



持田酒造での即席講演会



岡屋小路と案内板



高齢者もイベント参加(片原町)

出雲今市・高瀬川沿いのまちづくり

伊藤幹郎

出雲市役所

■ 高瀬川と歴史的街並み

高瀬川は、出雲地方の中心の在町である「今市」の中心部を東西に流れている。

今市は、「出雲鍔」（寛延ごろに松江藩士の柳生軒虎千が著したともいわれる。）によると、16世紀後半に改めて町割が行われた市場町である。当時の町割りの基本は、近代以降の交通機関の影響を受けながらも、現在もその多くは、旧態をとどめている。

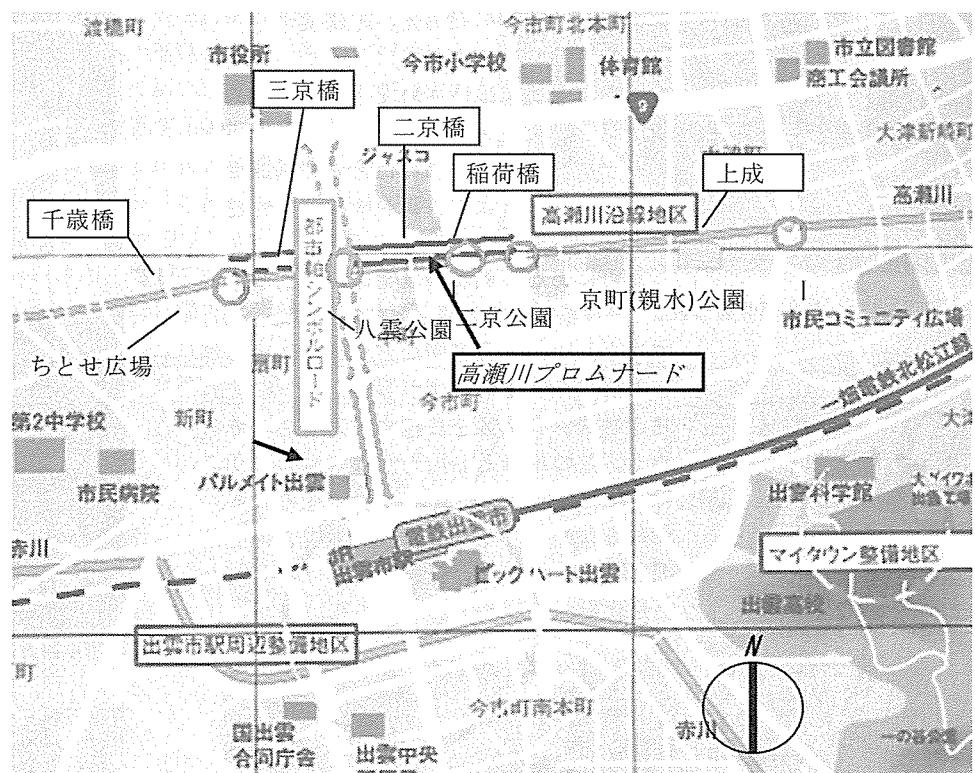
この高瀬川沿線には、海鼠壁と来待石の棟石、銀黒瓦が特徴的な歴史的な街並みがみられる。上成橋付近には、藍染めの工房やお茶などを扱う商家があり、出雲を代表する景観となっている。また、沿線には神社仏閣も多く、現在、南側の市道は、市街地を東西に抜ける自転車道に指定されており、中心市街地における水と緑の多い潤いの空間となっている。



上成橋付近の商家



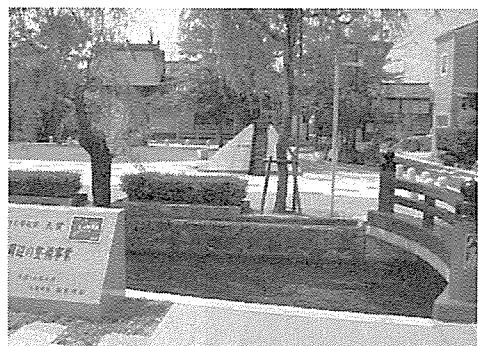
二京橋付近の旅館



出雲市の中心市街地と高瀬川

しかし、沿線の町屋の中には、建替えの時期にきているものも少なくなく、徐々にこの街並みも変化している。特に、中心市街地の都市計画街路の拡幅整備に伴って、移転や建替えによる建物の取り壊し、住宅や店舗の郊外移転が促進され、歴史的な景観は、ここ数年、大きく変化している。

一方、親水の水辺整備や都市公園の整備によって、公共空間に潤いが持たされ、流し雛などの地元の行事や八雲神社の祭りが賑やかになるなどの効果もでている。



高瀬川と八雲公園・八雲神社

■ ホープ計画による景観整備

高瀬川沿線のまちづくりが動き始めたのは、昭和62年度に策定したH.O.P.E.計画（地域住宅計画）が、契機であった。当時は、まだ高瀬川には、車の所有や進入のため、多くの私設橋が架けられ、街並みへの配慮のない工作物も多く、また家庭排水の混入など、多くの問題を抱えていた。

ホープ計画では、

- ①私設橋の統合と修景整備
 - ②沿線の空地や橋詰のポケットパーク整備
 - ③岩樋付近や主要な橋の修景整備
- などが、モデル的な整備として取組まれた。

沿線住民との勉強会や設計協議が進められ、当時としては、ワークショップ形式による設計は、早い取組みであった。既得権の絡む私設橋の撤去や統合する橋の位置調整、また、公園のデザインには、設計図や模型をつくりながら検討をした。最終的に市による「ふるさとづくり特別対策事業」等の導入により、計画が実施された。

また、この計画以降、高瀬川を管理する水利組合によって、石張りの護岸整備工事も行われ、護岸の景観整備が進んだ。

■ 民間における景観整備

ホープ計画の中で、高瀬川沿線の街並みづくりの重要性が指摘され、モデル的な住宅や店舗の改修プランを地元建築家の協力のもとで作成した。

その後、出雲市の景観賞や景観協力賞を受賞する住宅や店舗もでている。

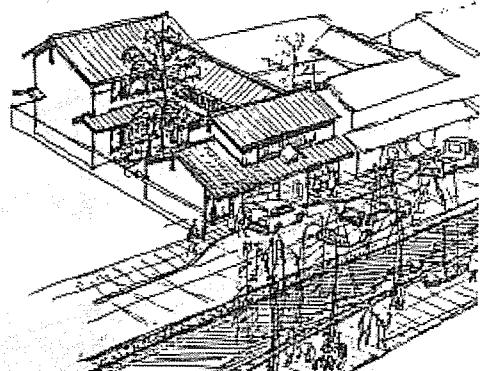
ホープ計画を機に、出雲市では、平成元年度に「出雲市まちづくり景観条例」が制定されたが、昨今の「景観法」制定への動きなど、歴史的な街並み等に関する制度面からの検討がなされる中で、この沿線地域においても、改めて検討が必要であろう。



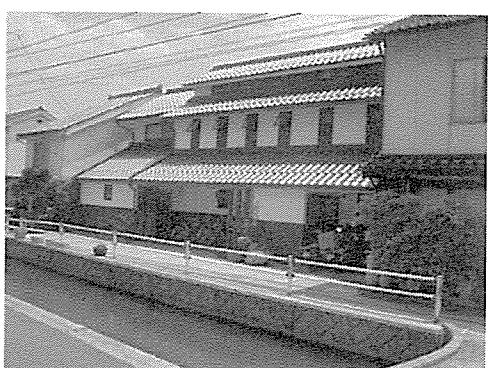
千歳橋付近の私設端(昭和63年当時)



千歳橋付近のポケットパーク(現在)



高瀬川沿線の民家・店舗の整備イメージ



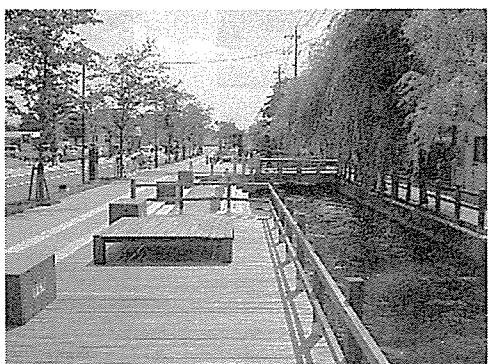
出雲市景観賞を受けた住宅

■街並みまちづくり事業による整備

平成8年度の中心市街地活性化地区の指定以降、出雲市の中心市街地を南北に結ぶ4本の都市計画街路整備が進められ、これに伴って、高瀬川にかかる橋が拡幅架け替えされることになった。

平成14年度に、高瀬川沿いの二京橋から三京橋間には、川に面するプロムナードとして、桜並木とウッドデッキが完成した。

現在は、高瀬川と直交する出雲市駅から北へ向かうシンボルロード「くにびき中央通り」の拡幅が始まったところである。これに合わせて、大梶七兵衛の銅像のある三京橋が改修される予定である。川と橋は、橋詰めの空間とともに、町の顔として、重要な整備ポイントである。地元商業者や市民がワークショップの形で基本設計段階から係わり、デザイナーと協働作業や議論を尽くすことが重要であると考える。



高瀬川プロムナード（二京橋～三京橋）

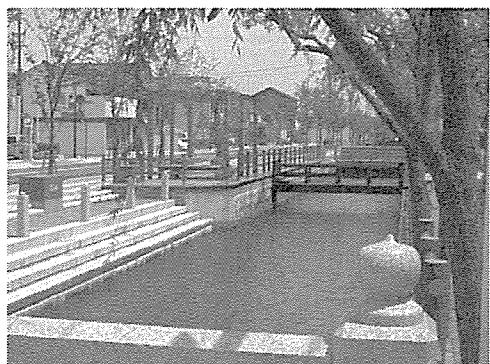
街路整備の一方で、道路拡幅に伴って、沿線の建物が立ち退くことにより、歴史的な街並みが失われつつある。居住者が立ち退いてしまい、残地のみが残るとなると、整備された街路には緑は多いが、寂しい街並みになることも予想される。そうならないためには、建物と一緒に景観整備、そこに住む人のまちづくりへの思いと実際の係わり方が重要である。

特に、高瀬川沿線は、住宅や店舗併用住宅が多く、生活空間と街路・川の空間との連続性が大切である。事業の実施に向けては、地域住民との協働作業によるきめの細かいまちづくりが大切である。一つ一つの建物、サイン、工作物、植栽などのデザインに配慮することが重要である。

高瀬川と路地や街並み、酒屋や蕎麦屋など地域の商店や住宅が連携した持続的なまちづくり、景観整備が求められている。



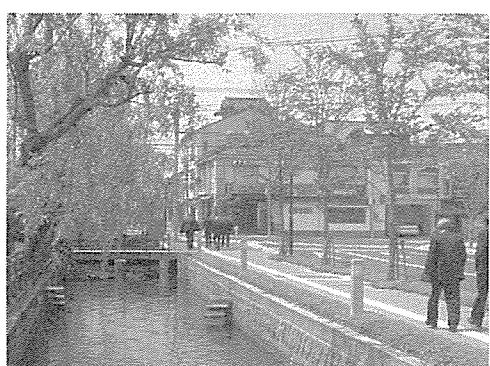
南泉寺の松（二京橋付近）



同上（親水護岸とウッドデッキ）



高瀬川と民家（京町公園付近）



同上（桜と柳の並木）



加田町（高瀬川からの路地）

暮らしのなかの 資源を活かした 都市観光

永井 努

前松江市観光
プロデューサー

私は平成11年1月、(社)松江観光協会が全国公募を行った観光プロデューサーに着任した。その後本年3月末の退職までの約5年間、「暮らしのなかの資源」を生かすことを大切にしながら、「松江の観光」に携わってきた。

私が着任した当時、松江市では市長のリーダーシップのもと、市内の流動性を高める「レイクラインバス」観光循環バスやお堀を巡る「堀川遊覧船」の整備が進んでいた。また新たな集客施設の「ティファニーティ園美術館」や花と野鳥の公園「松江フォーゲルパーク」が誘致され、行政主導のもと観光都市としての基盤整備が進みつつあった。

しかしその一方で、江戸文化を色濃く残す町並みは少しずつその姿を失っていくよう、古くから育まれた伝統や生活文化の残る旧市街地も空き店舗が増え、人通りが減っていた。市民の意識はどうかといえば、「観光立市」としての意識が希薄であり、官民、住民が一体となって観光に取組む仕組みづくりが必要となっていた。

「水の都 松江」において、宍道湖を懷に抱いた立地と豊な地域資源を観光に活かすためには、観光客が市民と交流しながら文化や歴史に触れる観光メニューが求められていた。豊かな地域資源を持っているだけでは観光に活かせず、観光客がいかにそれに触れることができるか、参加や体験のできるソフト開発の整備が必要であった。特に歴史ある都市の暮らしの中にある伝統や生活文化、中心市街地の老舗店舗の持つソフトを引き出すことが重要であった。

それには老舗店舗の経営者はもちろん、市民がその価値を認識し評価をしなければならず、そのために市民を対象に、様々な体験と中心市街地の魅力を探る「まちあるきツアー」を実施した。そこへ観光客の参加も促すことで、市民が観光客と交流しな

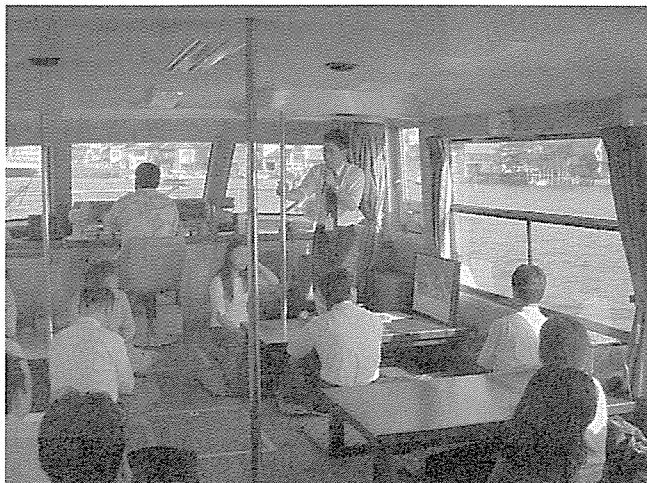
がら歩き、体験を共有していった。観光客の評価をじかに耳にすることで、それまでまちなかの観光資源について懐疑的な考えを持っていた市民や老舗の経営者は、その価値を新鮮な気持ちで受け止めることができた。

このようなソフトメニューにおいては、市民が日常空間の一部に観光客を受入れなければならず、地域ぐるみのホスピタリティーが不可欠であった。そこで、市民向けに「おもてなしの心」の必要性や地域と観光の関わりなどを発信し、観光客の受入れへの理解と参加を求めていった。現在でも7代藩主松平不昧公がその礎を築いた茶道文化が日常生活に根付いており、「おもてなしの心」は徐々にではあったが確実に浸透していった。

こうした取り組みの積み重ねが市民や商工業者の評価を生み、まちあるきや体験型ソフトの育成が広がる素地が培われ、団体から個人へと多様化する観光のスタイルに適したまちあるき、中心市街地の老舗店舗で和菓子作りや抹茶点て、造り酒屋を廻る体験などの整備が次々に進んだ。

さらに、将来に向けて危機感を持っていた宿泊施設の若手たちが賛同し、地域資源の掘り起こしに積極的に参加し、より多くの観光客にメニューを提供できるよう情報発信や旅行会社への商品化などに務めた。

たとえば、市民にとっては当たり前の朝の風景であった宍道湖の覗漁を見てもらうだけなく、遊覧船の上から漁を間近に見せ、その音を聞かせ、覗の浄水実験や汽水湖の恵み豊かな自然を紹介する「朝の宍道湖エコクルーズ」を期間中毎日運航させた。その際にインタークリターとして、観光だけでなく環境のガイドを行い、多くの観光客に豊かな自然に囲まれた松江を印象付けた。こうした動きに市民グループも賛同し、現在では共同でガイドを務め、市民が参加し



朝の宍道湖エコクルーズ（船内）



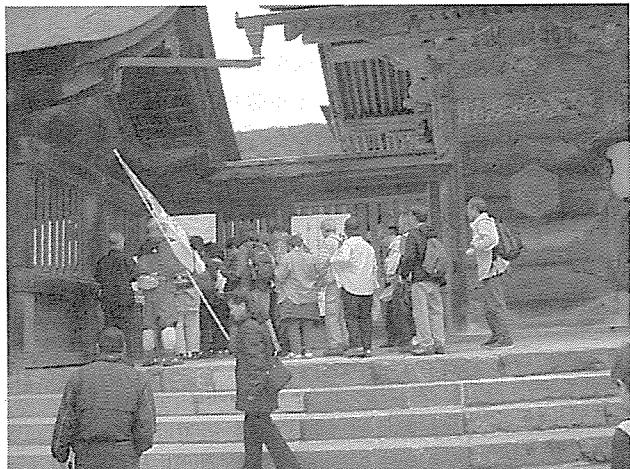
まちなかの散策（松江市惣門通り）

た観光商品として定着している。

その他市民グループが中心になって地域の食文化を掘り起こした「出雲蕎麦やめぐり」は、市民にその存在と価値を訴えていくだけでなく、観光客が「食」を目的としながらまちあるきを楽しみ、蕎麦や地酒味わう観光商品になった。

こうして5年間松江市の観光地作りに関わってきた中で、ハード整備中心の観光から、地域の資源を活かした体験やまちをあるくソフト型の観光スタイルへ少しずつ移行してきた。行政が主体の観光地作りから、市民や民間が関わりを深めた持続可能な観光地作りが始まったと言える。ここで広がった観光に携わる人々の輪が、将来に渡り「観光都市」としてのまち作りを支えていくであろう。

残念ながら多くの都市がそうであるように、松江市においても曖昧な観光客の入り込み数の増減が評価の基準となり、過大な目標のもと即効性の高い新たなイベント造成による増加策をとる傾向にある。しかし、一時的に数を増やすことはできても、長期的なリピーターや交流客を確保することはできない。やはり多くの市民の参加のもとで再度地域資源を見直し、市民が評価するものを共に育て、観光的な価値も見出していく長期的な施策が必要とされている。今後も、市民や民間のおもてなしの心を育み、地域に誇りが持てるまちづくり型観光を進め、行政とのパートナーシップのもと、「住んで良し、訪れて良し」の松江となることを期待したい。



神在月ツーディウォークでのガイドの様子



宍道湖のしじみ漁

堀川の新しい祭りを！

吉永 邦晃

年に1度、3日間の祭りを提案する。松江堀川（内堀、外堀）を家紋入り高張り提灯三百で囲む。

高張り提灯の効果は堀川を明るくする為ではない。むしろ陰翳の闇な環境を創ることにある。

闇に近い闇は多くの不要なものを包み隠す。この陰翳こそが都市部では失われた日本古来の環境ではなかったか。高張り提灯は動かない。それを補う為に遊覧船の船首に小柱と葵紋高張り提灯をしつらえ、橋下では前傾させて通過できるように屋根の部分と連動させて運行させる。可能であれば祭の期間は五百円程度の料金に留めたい。又三艘に一艘くらい又一艘一人の割合でうるさくならない程度に邦楽の三味線、鼓弓、尺八、鼓などの演奏を爪弾き程度の音量で欲しい。各数寄者の自主的な参加を要望したい。時に可能なら、畳一畳程度の仮舞台を付けて河上で一旦停めた船上で踊りや舞の費一差しがあっても良い。座敷舞の日舞は畳一枚以下で舞う事が出来るのではないか。各流派の交替での競演があれば楽しい。これらは各自の自慢の晴舞台とすることになり立つ。そのためにその場あるいは後日人気投票による番付が出来ても良い。強制的或いは負担に思われてはとても続かない。やる方が面白いとか遣り甲斐が無ければ継続しない。

三百という数は橋と橋の間隔からおおよそ割り出したものである。ぎっしり並べる必要は無い。あくまで家屋の軒先に無ければわざとらしい。もし寂しすぎるとあれば堀の反対側にこの場合家紋無しの別種の祭提灯を置く事でカバーすればよい。

インターネットで提灯について調べると意外と安価で高張り一つ一万円ぐらいとあったがどう見ても安っぽいものであった。何年も補修しながら使う為にはしっかりしたもののが望ましいし、見栄えからといってあまり小さく貧弱では困る。某家で特注したところ一張り十五万だったそうな。しかし三百というまとまった数なら十万以下で出来るのではないか。家紋を手書きにすれば大変だが当節はパソコンでフィルムにプリントする事が可能だからそれを貼り付ければかなり安価になろう。骨を金属に油紙張りでなくビニール引きのクロス張り、火災の危険と持続性からして光源は蛍光灯。補修保管の問題等もあるが折り畳みが出来るからさほど大きな倉庫は不用だろう。以上から考えて一年で駄目になるものでもないから、新調時はともかく補修、補完費用等を考えても年間当たりの費用はさほどには

なるまい。安く上がって効果的あって欲しいのである。此の環境を更にふくらます提案が多く出て貰いたい。

尚この発想には参考にした先達があることを付記しなければならない。今著名な存在となった風の盆である。人口二万三千人の町で夜明けまで静かに踊り明かす。踊りと三味線と鼓弓の音に惹かされて、三日間で二十万から三十万近い観光客が訪れ、収容しきれない泊り客が次の町その次の町と溢れかえるという。しかも交通は不便な所である。

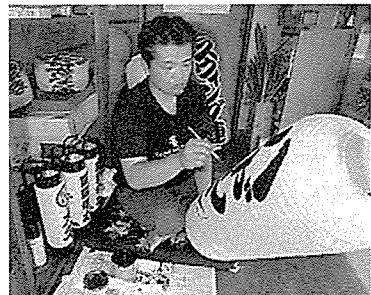
祭と言えば騒ぎが付き物だと思われているが、松江人の性格はいわゆるお祭り騒ぎに向かないのではないか。不適なものは続かない。在来の観察によれば多くの松江人の祭への参加方法は観客になることである。花火大会、天神祭、佐田さん武内さんにしても参加型で主人公になる事ではない。しかし二分法で観客と主催者参加者と決め付ける以外に陰でもてなす人々も要る。松江屋が客をどうしてもてなすかである。町内毎に競うコンテスト型がよい。それも費用は安く如何に効果的であるかアイデアを競うのである。この感覚が幾らかでも身に付けば普段の街作りの発想にも影響が期待できるのではないだろうか。これは、極めて小さな存在ながら、商人として生きてきた自分の思案である。

イベントに懐疑的な私があえて祭というイベントの設定として堀川を定紋高張り提灯で囲むという提案をする理由は、松江の橋北部の堀川は城の堀であり、武家屋敷地帯の象徴として普通の提灯ではなく、格調を示す定紋入りの高張り提灯を門戸に掲げ、必ずしも以前の風情を持たなくなっている地帯に灯火と闇の織りなす省略の効果を利用する事にある。更に松江人の特性として、いわゆるお祭りに飛び込んで大騒ぎする風潮はないことから、べつな形の祭を提言したいのだ。

イベントは目的又はそのこと自体で終わるものでなく、目的を果たすために役立つ手段でなくてはならない。物事を学ぶには大原則として、師、先達の求めし跡を求めず、その求めし物を求めよであるはすだ。学ぶは真似ぶから発したことではあるが、まねの中から創造的なものは生まれない。真似は何処までいっても真似で、学ぶには何を求めるかという事を知り、先人の精神と取り組む姿勢を得て自分に適したみちを開拓することだ。

日本の祭は元来地域を左右する宗教を中心になっていた。しかし移動が当たり前にになって地域に完全に固定した社会でなくな

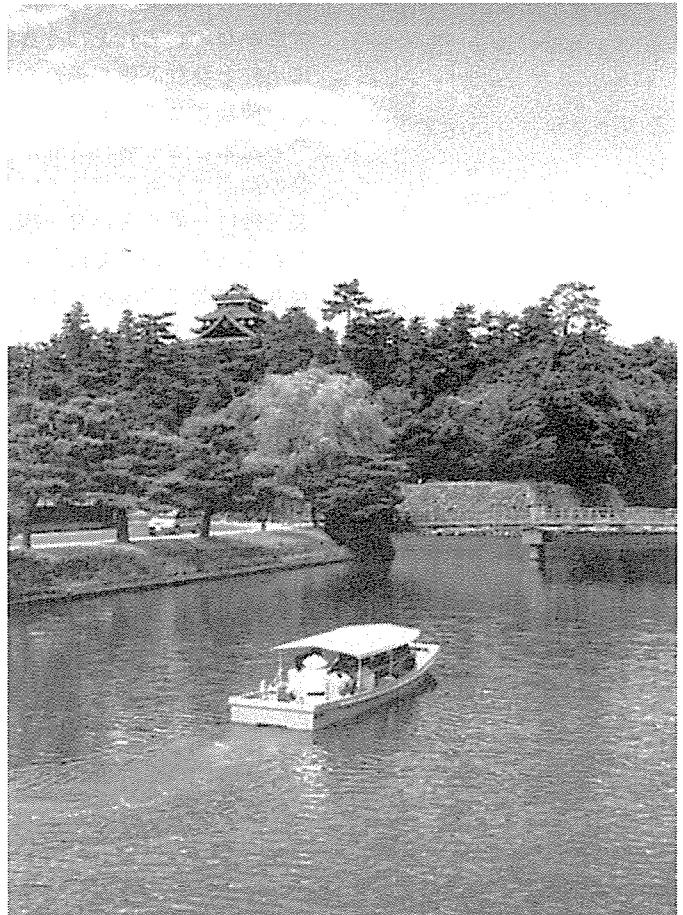
った以上、都市部では在来型の祭は存続が難しくなっている。人口の移動が祭への参加者中特に若者の不足をきたし、アルバイトを雇わなければ実行できないところも多い。単なるイベントでは、一過性の経済効果である場合が殆どである。興行サイドの仲間意識・連帯感を別にして、実利として



高張り提灯



かつて堀川で行なわれた頃のホーランエンヤ



堀川遊覧

の結果中心で考えれば、効果はさまで大きくはないようと思える。

街の再生を真剣に考えれば。今松江に必要なことは将来を睨んだ独自性が観光客を惹きつけるだけの効果を伴う街作りでなくてはなるまい。薄っぺらなものではすぐ飽きられて持続性がない。但し早期から多少なりと経済効果を得られればこれに越した事はない。財政的にも無理は続かないからである。イベントではなく「祭り」を提案するゆえんである。

元遊郭「米江旅館」 での三人展

板垣 正明

まつえ・まちづくり塾

松江市中心部に建つ旧米江旅館は、平成13年に手続きが始まった、松江初の登録文化財である。建造に5年もの歳月をかけ、昭和2年に完成した木造近代和風建築であり、鉄刀木や杉の本絞りなどの稀有な建材のふんだんな使用や、築後70年を経ても、材の噛み合わせにほとんど狂いのないという技巧の高さが、見る者を圧倒する。完成当初は遊郭として、その後は旅館として使用されていたが、建物の老朽化や周辺環境の変化などによって廃業を余儀なくされ、平成10年の旅館閉館以降は開放されることなく空き家となっていた。

私たちも見学させていただいた際には「圧倒された」わけだが、どういう訳か「空き家ながらも立派でいい。何かで使ってみたい」という想いが膨らんだのである。

そこで、お花や掛け軸を飾った姿を眺めながらの「茶話会」をしてみたいと、所有者の方に申し入れた。空き家であったこともあり、快く承諾していただけたが、不特定の方が入館することは遠慮して欲しい旨の申し入れがあった。現所有者は(こういう表現を許していただけるのであれば)旧米江旅館を愛しておられる。であるからこそ、人に見てもらうのが嬉しいために、申し出には快く承諾した一方で、不特定の方が入館することによる建具等の破損や盗難に対して懸念を持っておられたのだ。既にその気持ちに共感してしまっていたので、「茶話会」は私たちだけでおこなった。これには、現所有者もお招きしたが、「久しぶりに多くの人で賑わって旅館も喜んでます」と言っていただけたのは、とても嬉しいことであった。

続いておこなったのは、この建物の「大掃除」である。「茶話会」を通じて生まれた「この建物にもっと触れてみたい」という至極単純な思いと、所有者の「日常の掃除が大変で」という感想がうまく噛み合った

結果実現したもので、これも不特定の方を対象とせず、私たちだけで半日かけて建物全体の掃除をした。ありがたいことに「大掃除」に対する所有者からの評判も上々で、これ以後、「大掃除をさせていただく」ことを前提にして、仲間内での一日限定のCAFÉや講演会などをこの建物で催させていただいていた。

この時期は、所有者の旧米江旅館への思いに共感しながらイベントを行ってきた。それが「不特定多数お断り」とか、「掃除します」と言った対応につながり、結果として所有者との関係が良くなっていたようにも思える。また、所有者にとっては、多くの人が旧米江旅館に入っても大丈夫ということを確認する時間にもなったかもしれない。

そして、今年の5月に「三人展」と銘打った地元出身の3人の芸術家による作品展がおこなわれた。ここではじめて、私たちは不特定の方の旧米江旅館への来訪を想定している。見張りをつける等のセキュリティー対策を前提として、所有者に申し込んだ所、快く了解していただけた。それどころか、他の誰よりも積極的に、この作品展の案内に骨身を削っていただいたのは現所有者の方であった。最終的には10日間で延べ400人近くの方が来訪され、また建物への損害もなく、無事に作品展が終了された。

こうやって振り返ってみると、私たちが行ってきた一連の活動の根底にあるものは、どうも「所有者にいかに信頼してもらえるようになるか」に尽きるようだ。初めて建物を見学したときから三人展の開催まで丸2年、これが所有者との信頼関係構築のための時間として長いのか短いのかはわからないが、この期間が今後の活動の礎になるだけは断言できる。

最近、所有者の方とは、古民家等をギャ



米江旅館



大掃除

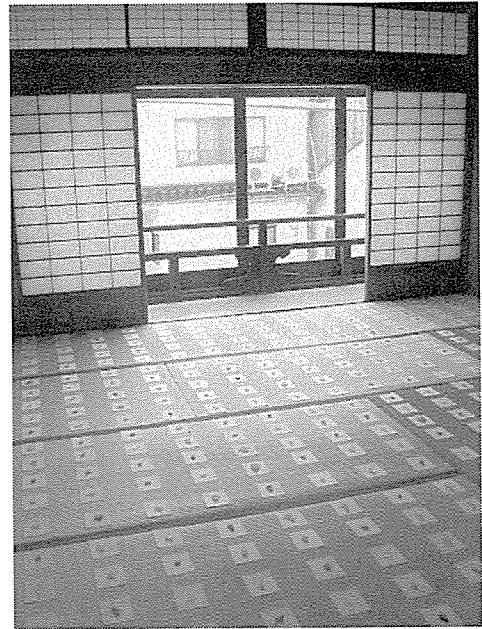
ラリーにして開放している近隣の事例がよく話題に登る。まだまだクリアすべき課題は多いが、いつか、旧米江旅館が開放され、多くの人がこの建物に触れる日が来たらいいなと思うと同時に、そのための一助となつた”かも” しれないと思えるのは悪くない気分だと思っている。

日本各地にある文化財、あるいは文化財として指定はされていなくても地域の歴史や風土を色濃く伝えているような建造物

で、地域の活性化に寄与することを期待されているものは数多くあると思われる。しかし、それらが十分な機能を発揮するまでには、様々な問題があり、その解決の方法もそれぞれ異なっているだろう。私たちの場合、「自分たちが楽しみたい」ためにおこなったいくつかの活動が徐々に発展し、“結果として” ある建造物が地域の活性化にも寄与しうるようになってきた、という過程をたどった。



茶話会



作品展の一室

JUDI 作品発表会 '04

柳田 良造

YANAGIDA RYOZO

代表幹事

プラハアソシエイツ（株）

今年は大変なアツイ夏であったが、JUDIにとっても「魅惑の3days」と題された第14回総会は熱い夏の思い出となった。7月18日JUDIのメンバーによる、活動や作品の発表会が総会開催に合わせ行われた。

JUDIの日常活動とはブロックでの取り組みをベースに行われているが、従来活動の成果の発表や情報交換の場がないことによって、JUDI全体の活動が見えにくかったり、せっかくの取り組みが相互の交流しないことなどの課題があった。そこで日頃の取り組みや問題点などを発表し、忌憚なく批評しあう場をつくるによって、情報交換に役立てるとともに、地域で都市環境デザインに取り組むJUDIメンバーの考え方や技術を高めていくことを目的に作品(研究、活動などを含む)発表会が企画されたのである。これは年1回の総会をより魅力的なものとし、多くのJUDIメンバーの参加をよびかける意味も込められていた。

今回は第1回目の試みであり、時間的にも企画が決まってから3ヶ月ほどしかなく、発表者がどれだけそろうだろうか心配されたが、ふたをあけてみると公募プロジェクト2題、各ブロックからの発表10題と海外セミナーの発表5題の計17題の発表がそろった。一つの会場で朝10時から夕方まで、発表と質疑をいれてこなすには丁度いい本数であった。いずれも内容といい、プレゼンといい、非常に充実したに中味で、改めてJUDIメンバーのレベルの高さを感じる次第であった。短い期間にもかかわらず準備していただいた各発表者の方々に、この場をかりて感謝したい。

今回は準備期間が短かかったせいもあり、各ブロックや海外セミナーなどに発表を割り当てるにお願いしたが、本来の趣旨はJUDIメンバーの個人単位での発表を前提としているものである。次年度以降も実施されていくと思われる所以、われこそはという方は、いまから準備していただきたいと思う。そういう意味もこめて、第1回のJUDI作品発表会'04の様子をご紹介したい。場所は東大農学部内の弥生会館。香山寿夫設計、主要構造は木造で、エコロジカルな素材で構成されており、その中の十四角形の一条ホールと名付けられた講堂が会場。参加人数は会員36名、一般4名、学生46名の計86名で、予想以上の参加者。とくに学生の参加が多かったのうれしかった。用意した資料は50部で、あわわててコピーを追加するうれしい誤算も。参加者には、発表についての感想等を書いてもらうアンケートも行った。アンケートからの意見も紹介しながら、発表会の様子を報告したい。

午前中(10:05～12:00)は横川昇二さんの司会で、公募プロジェクトの発表2題。

■ 長井ランタンマーケット

(東北ブロック 発表者: 斎藤浩治)

コメントーター(近田玲子、鳥越けい子)

昨年も山形県置賜盆地の西部に位置する長井市で行われた環境イベントの第2弾。最上川の水運を利用し、米沢城下の商業の拠点として栄えた長井には、まちの中に網の目のように流れる水路や蔵や屋敷林など多くの地域資源や魅力的な空間が時代に取り残されたように眠っている。そこにテーマを設定し、地元の活動グループと協働しながら環境資源発掘型のイベントを仕掛けた試みであり、テーマは昨年が「色彩」、今年が「あかり」であった。長井には黒獅子祭りの際に灯される提灯や「長井雪灯り回廊」など、あかりをテーマとした賑わい創出の取組が実践されており、まちの新しい資源となる可能性が秘められている。このような背景を踏まえ、今回は代表的な地域資源である水路に着目し、まちの魅力発見と賑わいづくりを目的とした『あかり=キャンドルランタン』による水路とまちの演出をねらったものである。

イベントは6月26日(土)、6月27日(日)の二日に渡り行われた。26日(土)は午後1時から、東北芸術工科大学の学生のデザインによる優秀作品3点を参加者(市民、学生、JUDI)が一緒に製作しする手作りランタン工房。夕方6時からはメインの、市民と一緒に手作りしたランタンによるまちなかの灯りイベント。会場はまちを東西に流れる撞木川(しゆもくがわ)と、本町商店街にある昭和初期の洋風木造建築物「桑島記念館」とその周辺。同時に撞木川に近いお寺の境内でのほのあかり夜市。ランタンの灯りの下でマーケット(夜市)、穏やかな灯りに照らされて、ガラス工芸品や装飾品などがきらめく不思議な夜の市場。庭園で灯りのアート展や旧郡役所を使っての「バロック音楽の夕べ」も開催。

翌27日(日)は旧郡役所の1階ホールでまちあかりトークセッション。風土がつくりだした街なかの資源(歴史的遺産、伝統工芸、生活文化など)をどのように新しい生活中にじませ、生かすがテーマ。コーディネーターは久木田貞一、パネラー: 日原もとこ(環境色彩学)近田玲子(照明デザイナー)鳥越けい子(サウンドスケープ研究家)。感性豊かな3人の女性、色、光、音の専門家の心温まるトークが展開された。

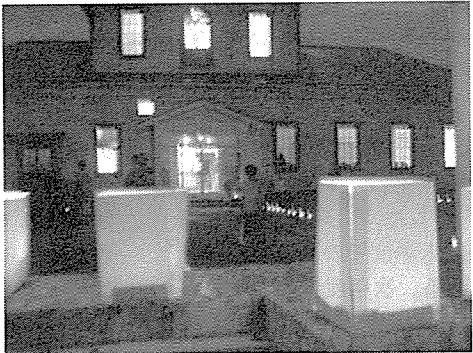
「長井のまちの楽しみ方をJUDIとして提案する実験的な試みです」と企画書でうたわれているように、大変な意気込みと労力が投入され、もりだくさんの内容で行われたイベントであった。DVDを使いビデオの映像と音も交えたプレゼンテーションもあって、会場の楽しげな雰囲気が伝わって



長井ランタンマーケットポスター



市民によるランタンの手作り



手作りランタンによる灯りイベント



ランタンマーケット (ほの灯り夜市)

くる。

コメントーターなどの意見では「現代の過剰なモノ、色、デザイン、音、光の氾濫、そういうものを見直すきっかけになるのではないかでしょうか」、「環境とのかかわりのなかでの光の意味を問い合わせる意義を感じた」と、環境資源の発掘から仕掛けたイベントのセンスの良さを評価する声が多かった。

一方、「ガードレールに色を塗る試みだが、むしろイベント中は取り扱いランタンによるガードの方が効果的だったのでは」、「ランタンを最後に参加者にあげる終わり方もあっても良かったのでは」というようなアドバイスや「せっかくのイベントが時間的に重なり過ぎており、参加できなかったものもあったので、すこし整理が必要ではなかったか」というイベント参加者の声もあった。

いずれにせよ「うまく発展する芽はある」、「予算が今後、もっとでるようになら、きっともっと規模を大きくしたランタンの夜市ができると思う」、「アイディアはおもしろい。イベントも旨く行っている。今後どのように展開するのか。そのためにJUDIが何をやれるかが重要」、「今後市民の間に受け止められ、自ら継続的に開催して行かれるよう、市民と一緒にプログラム、実行プラン等を残してください」と、これからも発展させていってほしいという期待の声が大きかった。

■ 琉球の美を探る—伝統の技からその美を考える・その1

(琉球ブロック 発表者：阪井暖子)

コメントーター (難波健、角野幸博)

具体的な活動は琉球の伝統工芸から、現代の沖縄の環境・暮らしのあり方を考えることを目標にした「サロン・DO・美be」の開催。それを通じて、都市環境デザインに琉球の美を活かす「沖縄らしさ」を探った。

まず伝統文化や歴史的背景、県民生活に根ざすスピリチュアルな部分等の構造を解明する必要がある。伝統の技に見る琉球の美を歴史的背景から説明。王都首里街並み模型との比較による現在の街並みの現状と問題点をさぐる。歴史的には、地形を活かした構造により、首里城を中心としたまちが形づくられた。また首里城は琉球王国の王都の要であり、伝統工芸が集約されている。かつて首里城と街並みは「首里杜上で行けば 夜の明けて 太陽の照り居るように美しい」(沖縄最古の歌謡集『おもろさうし』)のように歌われた。しかし、現在その周辺まで都市化が進み、歴史的風致景観の再現が課題となり、世界遺産首里城周辺のバファゾーン設定も必要になっている。

サロン・DO・美beの活動は漆、木工、石、瓦



首里城復原模型



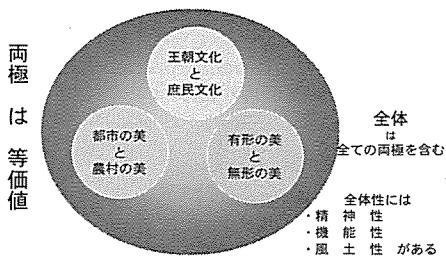
神アサギ

の伝統作家を訪ねた。第1回は漆工芸家の前田考允氏。沖縄の強い陽射しに「映える色」と「かきけられる色」、中間色はみえない。第2回は赤瓦職人の奥原崇典氏。沖縄の美は衣食住全てに存在している。本土復帰以降の都市開発は、戦災よりも悪い。第3回は陶芸家の大嶺 實清氏。生活様式=文化である。モノを見る力を持った生活者がいてこそ文化は育ち工芸が育つ。まちの美しさ=文化=そこに住む人たちの生活の有り様。

サロン・D0・美be活動を通して見えてきたこと。琉球の美の背景には湿潤亜熱帯の気候風土、多彩な交流・交易の歴史、ニライカナイと祖先崇拜の思想がある。

琉球の美を捉えるには、王朝文化と庶民文化、都市の美と農村の美、有形の美と無形の美という、「両極は等価値であり」、「全体はすべての両極を含む」という認識の視点が必要ではないか。その全体性には精神性・機能性・風土性がある。

琉球の美を捉える視点



都市環境デザインに琉球の美を活かすには

三つの「チュ」

- ①チュクウン 創る 伝統を壊しながらつくる
- ②チュカユン 使う 本物を見る目を育む
- ③チュナジュン つなぐ

琉球の美あふれる都市環境デザイン

これらを通して都市環境デザインに琉球の美を活かしていく方法として、三つの「チュ」を考えている。

- ・チュクウン-創る-伝統を壊しながらつくる
- ・チュカユン-使う-本物を見る目を育む
- ・チュナジュン-つなぐ-

サロン・Do・美beの今後の活動としては、○両極をとらえトータルな琉球の美をさらに探っていく、○「琉球スローデザイン運動」の展開、○工芸家シリーズに加え「集落編」、「自然編」、「生活編」を行っていきたい。

「大変、良かった。東京だとついいつ見えて来ない(見えていても扱いにくい)都市環境の風土と不可分のデザインのトータリティをはつきりおさえて私たちに示してくださいました」、「琉球の美の本質を究め、実際の仕事の中に活かしてください。沖縄の独自の都市環境を目指すべき」、「JUDI活動の基本を改めて考えさせられました。我々自身が生活の共通の価値基準を持つことの大切さを思いだしました」と発表への評価は高かった。一方「正調琉球節で素晴らしかった。ただスキがないので疲れないように」、「発想はおもしろいが、探ったあとどのようにそれらを活かしていくのか。その具体的なアイディアと空間環境へのおとしこみが課題では」のように注文もあった。いずれにせよ「伝統文化の色が濃い都市での都市開発は大変だなと思ったが、発表の仕方が学生の私にもわかりやすくとても良かった」とプレゼンも含め充実した報告であった。



ニフェー デービタン！

公募プロジェクトとは30万円の活動助成、約半年間の実施期間で行われる取り組みである。助成金とは、能動的な活動への呼び水として活用されることにこそ意味のあるものだが、今回のJUDI公募プロジェクトの対象となった2つの活動はいずれも、少額の予算で実施したとは思えないほど充実しており、魅力的なプロジェクトとなった取り組みであった。地元の商店街などを巻き込み、地域資源を活かしたセンスのいい環境イベントをつくりあげた斎藤さんたち東北ブロック、都市環境の風土と不可分のデザインの全体性への問題提起などJUDI活動の原点を問い合わせた石嶺さん、阪井さんたち琉球ブロックに拍手を送りたい。

ブロック作品発表

午後の最初のプログラムは、各ブロックから研究、作品発表(13:00~15:30 各15分)で司会は柳田良造であった。

■市民参加による稚内みなとまちづくり (北海道ブロック 発表者:酒本宏)

港湾と市街地という管轄の違い、国・地方の行政の思惑など、バラバラに展開してきた稚内のみなとまちづくりの現状に対し、市民参加で事業の枠を超えて、みなとまちの全体像、将来像を考えたワークショップ型の計画づくりプロジェクト。

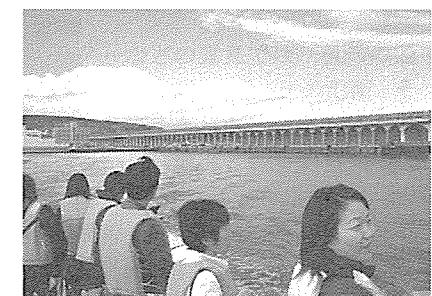
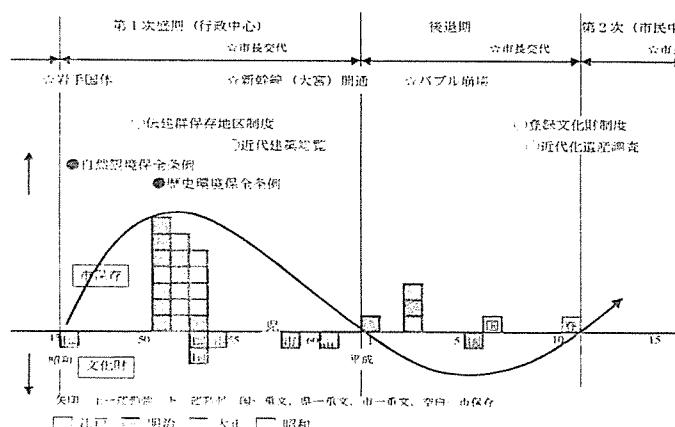
評価については、地域で行政などの思惑が食い違うなか、つなぎ役としての専門家の可能性について、「JUDI」のもうひとつの可能性がうまくでていた報告。どことどこを誰が、何のためにつなげていくかというのがポイント、「JUDI」もひとつの主体になれるということか」と評価する意見や「縦割行政との闘い、頑張ってください」というエールを送る声があった。一方「コンサルタントの業務報告か」という否定的な意見や「関係機関の計画、思惑が大きく異なるなかで、市民参加による提案がどのようにいかされるのか。定着していくんだろうか。市民からの提案に行政機関がついてくるのか」という危惧もあった。

また地域の環境資源について、「みなとそのものに魅力はあるのでしょうか。寂しくてもいいから、みなと自身の存在感が大切だと思います」や「どの地域でも、港と市街地の間が離れて、その間が殺風景でどんどんすさんできている。港らしさ、海のイメージをもっと、もっと皆さんで考えていいってほしい」という港の存在をあらためて問う意見も出された。

参加者の感想、評価が最も分かれた発表であった。発表者の酒本さんも暗中模索のなかでの試みであり、意見を聞きたいということで発表したという趣旨を冒頭発言していたが、そういう意味では問題提起として興味深い報告であった。

盛岡の歴史的環境の保存再生の取り組み

盛岡の歴史的環境の変遷



市民による稚内のタウン・ポートウォッチング



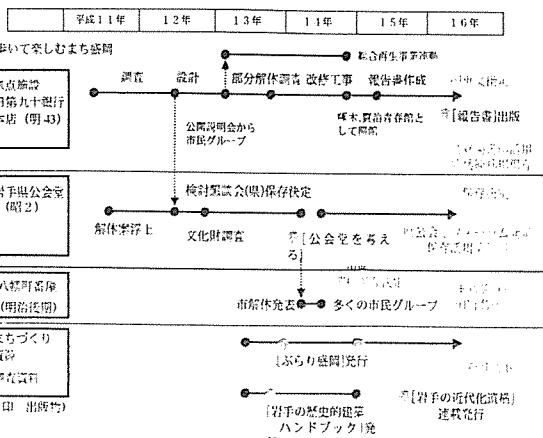
WSでつくった稚内のまちの将来イメージ

■盛岡のまちづくりと文化財

(東北ブロック 発表者:渡辺敏男)

風情のある街・盛岡の歴史的環境を活かしたまちづくりの取り組みも長い歴史をもつが、やはりその運動には波がある。昭和45年~55年頃が自然環境保存条例や歴史環境保存条例、伝建地区の制定等、行政を中心に景観をいかしたまちづくりで日本でも先進的な取り組みを行い、第1次盛期であった。しかし平成に向かえる頃から後退期に入り、停滞の時代が続いているが、ここ数年市民中心の活動で新たな第2次期を向かえようとしている。そのテーマとなっているのは横浜勉設計の旧第九十九銀行本店、岩手県公会堂、八幡町番家の保全再生と「ぶらり盛岡」発行などのまちづくり資源調査である。

歴史環境保全に関し、「修繕保全、いい仕事をされていますね」「横浜勉は知らなかったので勉強になった」「知らないことがいろいろあり、盛岡に対する新たな興味が沸いてきました」とさすがに、盛岡への高い評価の声があった。しかし「文化財の紹介のみで、まちづくりとの関係が不明」「文化財再生後のビジョンをみせてほしかった」など、まちづくりへの展開を期待する意見も寄せられた。





バスツアー



上空から見る東品川



写真コンテスト作品(飯田橋アイガーデン)



東海道を歩く桑名ワンディウォーク

第2回 桑名ワンディウォーク

歩くくわな 乗って歩けば御台所

北勢線七和駅から八間通りまでの 10km

2003年10月19日(日)

北勢線 西桑名駅前受付 8:30~9:30
北勢線 七和駅前受付 9:00~10:00

どなたでもご参加いただけます
300人

(小学生未満無料)
会員登録料: 中学生以上400円、小学生200円(北勢線西桑名駅→七和駅運賃を含む)
会員登録料: 中学生以上200円、小学生100円

桑名ワンディウォーク実行委員会事務局(桑名市都市計画課)
TEL:0594-24-1223 FAX:0594-24-1355
E-mail:tosukeime@kuwana.mie.jp

おもてなしPOINT! 桑名市総合センター

START

七和

北勢線

坂井橋

在良

蓮花寺

西別所

馬追

西桑名

八間通り

田町交差点西

桑名の駅様西所前に合流して楽しもう!

歩くルート

主催: 桑名ワンディウォーク実行委員会 廉理: 桑名ふれあいの運営委員会、北勢線運営協議会
協賛: 三井住友銀行、ヤマダ電機、協力: 桑名市社会福祉協議会、桑名の駅様西所前運営委員会、
ワークショップからいはあす工房、桑名総合文化センター(桑名市)

■ 東京 2003 (問題) バスツアー・写真コンテスト報告

関東ブロック (発表者: 高見公雄)

昨年、2003年問題として東京における大規模オフィスの集中的供給が起き、これによる賃貸相場の変動等いろいろなことが懸念されていた。その大規模の開発の事例、汐留や六本木 6 丁目等を一遍に(朝集合して夕方までの間に)概要だけを捉えてみると、また新しいことが見えるのではないか、との視点から企画されたバスツアー。参加者によるプロジェクトを撮る写真コンテストの報告も行われた。

「東京のバスツアーは毎回すぐれものです。地方の人も参加して我が国の首都圏のひだりの多さを認識してほしい」、「意欲的な企画はいつも楽しみにしている」という関東ブロック主催のバスツアーへの期待の声。

「スカイラインの破壊、足元のヒューマンスケール不足、高容積による建てつまり、都市再生の緊急整備地域は問題だ」、「スーパー・ブロックの開発、特に最近の東京に於けるものについてはつっこんだ話しをしたいと思うのですが、難しそうですね」というアーバンデザインとしての大規模プロジェクトへの批評の必要性や評価についての意見もあった。この問題は大きなテーマで、現在も東京では大規模プロジェクトが進行しており、JUDI としてのアーバンデザイン的視点から取り上げる必要性があるといえよう。

■ 歩いて暮らせる街づくり／まちづくり極意桑名流

中部ブロック (発表者: 集山一廣)

「歩いて暮らせる街づくり」桑名ワンディウォークとまちづくり極意桑名流の取り組みが発表された。桑名での「歩いて暮らせる街づくり」の出発は小渕内閣の経済新生対策(1999年11月)において位置づけられたモデルプロジェクトである。現在展開中の桑名ワンディウォークの報告。また桑名のまちの基礎が築かれた「慶長の町割り」着手から400年。将来に向けた桑名のまちづくりを、市民とともに考える「くわなまちづくりブック」の作成を通じた取り組みも発表された。

「街並み云々を論ずる前に、『歩く』という行為を原点においている点が素晴らしい」、「正しい歩き方の指導がよかったです」、「個人的に学ぶところが大きでした。今、大学で図書館の仕事とまちづくりの授業と、情報アートの授業をしていて、それがすべてつながるよう嬉しくおもいました」と歩くことを原点にした取り組みへの評価が高かった。また、まちづくり極意桑名流の発表については、「極意といいながら、一般的すぎる。もうすこし手法に個性を」との注文もついた。

■ 市民主体の景観まちづくり活動

北陸ブロック（発表者：坪正浩）

石川県の最南西に位置する加賀市は、かつて加賀百万石の支藩大聖寺十万石の城下町として栄えた。城下町の町割が継承され、江戸末期から昭和初期の町家が残るが、水害や火災などにより町並みや歴史的資産は減少の一途、現存するのはごく僅かになっている。平成6年歴史的資産が失われていくことへの危機感をもとに「大聖時まちなみ景観整備委員会」がたちあがり、保全活動がスタートする。最初に注目したのは、北国街道で、楽しく歩こう歴史街道の取り組みなどを通して、街道の石畳化や一里塚の再生整備が進む。続いて平成8年に「加賀市ふるさとの歴史景観を守り育てる条例」が制定され、山ノ下寺院群における町並み整備が始まる。当初、景観整備の議論は難航。しかし「主役はあくまで住民」との認識が高まり、地元住民によるまちづくり協議会の組織化や歴史的景観整備規準づくりが進んだ。北前船主の館を移築した「蘇梁館」の開設や、平成10年には山ノ下寺院群の一角に古民家を改修した「時習館」の整備などが進んだ。平成11年には観光ボランティアガイドが常駐する史跡案内所の開設、平成13年には特定非営利活動法人「歴町センター大聖時」を設立、城下町時代の町の時を刻むシンボルであった時鐘堂の再建などに取り組んでいる。

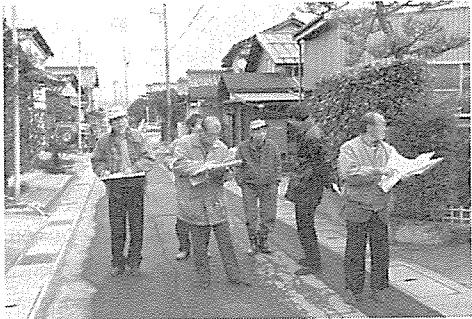
「身近なところに自分の知らない着実な『まちづくり』があったことを知りました」、「市民主体の町並み運動が貫かれているようで、徹底ぶりに驚きました」、「加賀市、子供をまきこんだまちづくり、うらやましいですね」、「よく頑張っている」、「コーディネーター的役割として JUDI のコンセプトが生きている。活力ある人々が多いのが、素晴らしい。のりがよい」など、取り組みを高く評価する声が大きかった。また「古い町名を続けてつかってほしい」などの、生活レベルでの歴史の重要性への期待もあった。

今年の9月17~19日にかけて、全国町並みゼミ大聖寺大会が開催される予定と聞く。それを契機に大聖寺地区での町並み保全・まちづくり運動がまた新たな展開をみせることを期待したいものである。

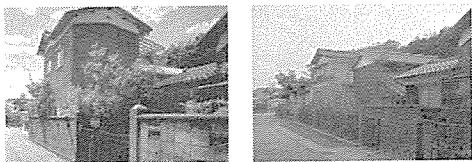
■ 熊野街道で探る―“歴史と向き合う街とは・癒しの風景とは”

関西ブロック（発表者：長谷川弘直）

毎年行われている関西ブロックでのフォーラムの今年度のテーマである熊野街道について発表。10月30日（土）・31日（日）に和歌山県田辺市やその近郊の熊野古道で開催が予定されており、地元の人々との語らいやワークショップを通して、熊野街道と街中再生、農村集落と熊野古道の創出について提言する。



住民による建物調査



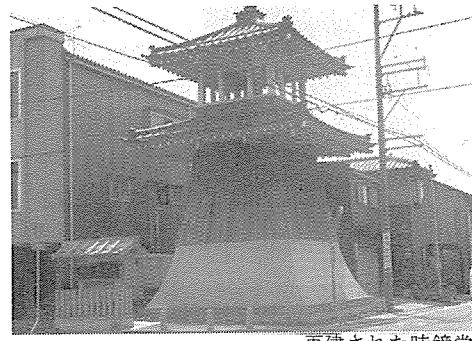
約束事に沿った景観整備事例



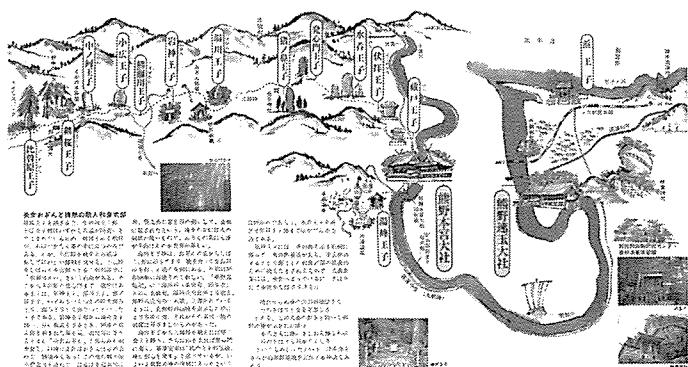
町並みづくり・あつたらもん(子供たちによる町歩き)



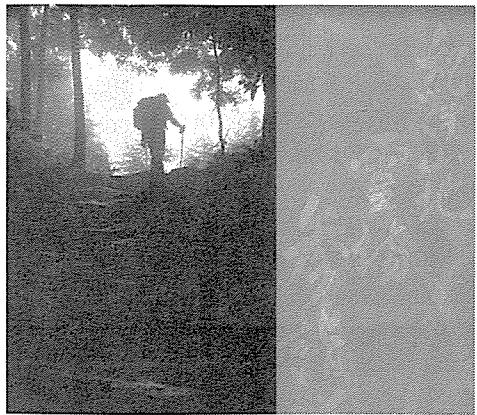
景観整備の拠点 時習庵



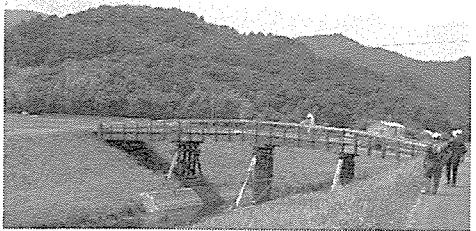
再建された時鐘堂



熊野周辺絵地図



熊野街道



街道を認識させる木の橋

「近いうちに訪れるので楽しみです」、「田辺でのフォーラム、歩きながらのワークショップ、楽しみです」、「世界遺産登録された自信がみなぎっている。波及効果大」という評価の声が高かった。

また、「熊野が今後あまり手をいれすぎずに、しかしポイントで適宜整備されることを期待します」という整備への注文や「確かに JUDI の『都市』の部分に規定される必要はないはず。そもそも JUDI はなぜ、『U』のみだったのだろうと考えました」のような田園、自然環境への JUDI として関心を高めていく必要性への声もあった。

■米子市アーバンデザイン委員会の活動

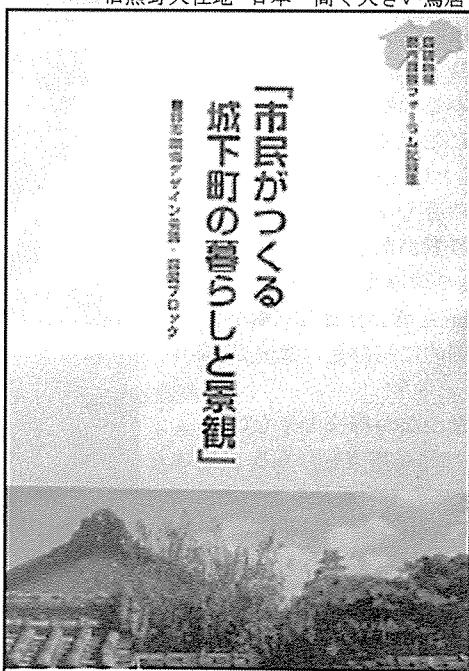
中国ブロック（発表者：杵村優一郎）

米子市でのアーバンデザイン委員会の活動の報告。そのなかで、米子駅前のモニュメント設置でのアーバンデザイン委員会と計画側とのやりとりなどが紹介された。

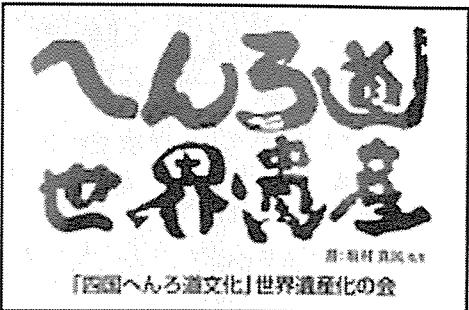
「市が依頼している委員会が反対しても、そのような変なものができてしまう、ということが考えられない。つまり委員会がちゃんとした『景観審議会』ではないということだろう。米子には景観条例がないのでは」、「米子はもっと活力があるイメージだつと思うので、少し消極的」との意見もあったが、「デザイン委員会の審査などに、今後景観法がうまくいかさるといい」と今後に期待する声も寄せられた。

■市民がつくる城下町の暮らしと景観 四国ブロック（発表者：本田寿）

昨年7月丸亀で行われた「四国四県都市景観フォーラム・市民がつくる城下町の暮らしと景観」からの報告と、四国ブロックの白石さんから四国へんろ道文化の世界遺産化をめざす活動の紹介もあった。丸亀で行われた城下町のフォーラムは、1997年10月に丸亀で行われたまちづくりフォーラムの第2弾。いずれも記録集として、出版されている。このように「景観フォーラムの記録集など資料がきちんとまとめられており、財産」、「特色ある文化や気候だと思うので、各行事の資料を見てみたい」など、四国ブロックの取り組みを評価する声や、「お遍路から考える都市環境デザイン、同感です」、「今後、四国遍路道文化世界遺産化と合流すると活力がでてくる」など、へんろ道への取り組みに期待を寄せる声もかなりあった。



旧熊野大社地・日本一高く大きい鳥居



四国へんろ道文化の世界遺産化

■ 博多部の社会実験

九州ブロック（発表者：福田忠昭）

博多とおりやんせプロジェクト2003－社会実験道路空間のコミュニティインフラ化 in 博多－と題した中世以来の国際都市博多の街と通りの再生をめざす活動。

しかしその博多も、都心部の空洞化（人口減少／賑わいの減少）やワンルームマンション・駐車場の増加により、1980年代には「このままじゃ博多がのうなる」という危機感を向かえる。1991年「博多部共同研究体」が発足し、「博多部再興計画」作成や博多まちづくり学校がはじまる（以後13回開催）。2000年今回のプロジェクトの事務局となつたNPO博多まちづくりが設立され、「まちづくり運動」から「目に見えるまちづくり」へ、通りの再活性化「博多回廊プロジェクト」社会実験の実施となつた。

社会実験は道路空間を地域に住む人・地域で商売をする人の手に取り戻すこと目標にした。道路は「地域（コミュニティ）」の「インフラ」、自動車を制限して、生まれた空間を有効に活用する、回遊性を高め歩いて楽しいとおりとする、をコンセプトに、呉服町コミュニティバス停＆オープンカフェ、輪タク（自転車タクシー）・プロジェクト、大浜・キヲヌク・プロジェクト、御供所・道草・プロジェクトなどの道を使った社会実験的まちづくり実践が取り組まれた。

「とてもよくやっている」、「街をつかうというベンチを置いてみるのはいい試み」、「計画と実行が基本的に生きている。フォローも良かった」、「本筋とは関係ありませんが、まずは輪タクは街の音やにぎわいを直接近くに体験する」という意がある。公共空間の利用について実験の試みはとてもいい」、「屋台の街博多の伝統を感じさせる頗もしい運動でした」と圧倒的に高評価の意見が多かった。

一方「駐輪問題はなかなか解決できない」、「道路空間の使い方は既成事実をつくることが大切」とのアドバイス的意見もあった。平成16年度も天神地区において、歩行者天国の実施やオープンカフェを中心とした通りの賑わいづくりなどが行われる。「このような社会実験のひとつ、ひとつが布石となり、質の高いパブリックライフを享受できる公共空間づくりが少しづつ進んでいくのではないか」と発表者の福田さんは締めくくっていた。期待したいものである。

■ 琉球ブロックの立ち上げと今後

琉球ブロック（発表者：石嶺 一）

昨年の琉球ブロックの設立から11月に那覇市で行われた全国ブロック幹事会とその時のワークショップ、公共の色彩賞への応募、公募制プロジェクトへの取り組み、今後の



活動の方向性について・・・の報告。

「1年だが、非常にアクティブに活動していく他ブロックへの刺激になっているよう思う」、「地域のこだわりがよかったです。琉球の美をさぐることと二本立てで」、「朱に関する実証的な話しが興味深かったです」など、琉球ブロックの立ち上げによるJUDI全体の活性化への貢献、その活動がJUDIの原点をもう思い返させる点があるなど、評価する声が大きかったです。

海外セミナー報告

午後2のプログラム（16:00～17:30 各15分）は海外セミナー報告。服部圭郎さんの司会で5題の発表があった。

まず国際委員会が行ってきた海外セミナー報告として、3題の発表。

■ 第1回国際交流ツアー：昇竜ベトナムの都市計画動向を知る

（発表者：望月真一）

JUDI アジアの専門家との交流。第一回のベトナムツアーは2001年6月10～17日行われた。訪問先はハノイ、フエ、ホイアン、ホーチミンシティ。「昇竜ベトナム」とは国土の形が竜に似ていることと、今後竜の勢いで国力が伸びていくのではないかというところからの発想と発表者の望月さん。

首都ハノイでの訪問先は農村都市計画研究所 NIURP、ベトナム都市計画協会 VUPDA。フエの世界遺産・王宮と離宮の見学とフエセンターのレクチャーを受ける。ホイアンはかつて日本人街のあった都市、現在街並み保全が日本も協力し、進んでいる。「ホイアンの保全の様子がわかつてよかったです」というアンケートでの声があった。

■ 第2回国際交流ツアー：UIA大会参加とベルリンを中心とした都市デザイン視察の旅

（発表者：南條洋雄）

UIA ベルリン大会への参加と次期 UIA 大会東京への招致活動の報告と、ベルリン、デュッセルドルフ、エムシャーパークなどの視察の報告。「集中して見学されていたようで、バイタリティに頭がさがります」、「ベルリンの再開発地域がなかったのが残念」などの意見が寄せられた。

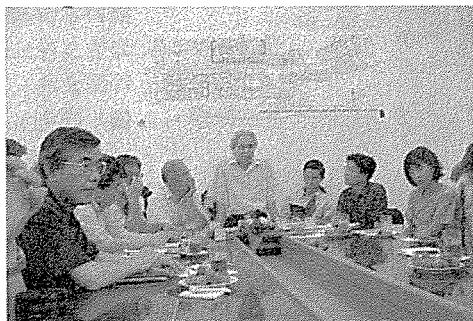
■ 第3回国際交流ツアー：上海・江南地方都市環境デザイン視察の旅

（発表者：南條洋雄）

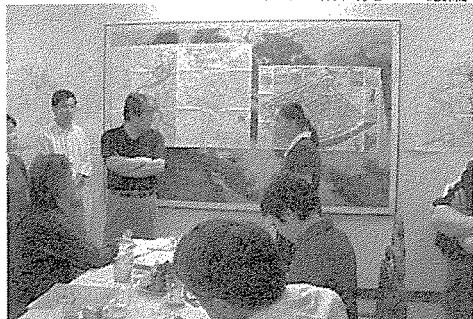
旅のサブタイトルは、「新旧ランドスケープ・まちなみ・建築を見る」で、訪問地は無錫・蘇州・同里・周莊・上海・杭州（オプション）。2003年11月29日～12月4日に行われ、参加者は26名（JUDI会員14名）であった。「新旧比較の視点があつて、おもしろかった」「細部にわたる取材、画像がよかったです。苦労のあとが話しのはしばしに見えた。」



上海の都市計画博物の模型



ハノイでの訪問先での議論



フエセンターでのレクチャー



ホイアンの街並み保全



在ベルリン日本国大使館での東京説教の晩餐会



デュッセルドルフの港湾地区



同里的水辺の景観

続いて、関西ブロックでの国際セミナーの報告が行われた。

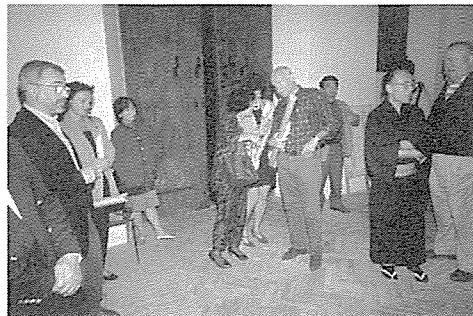
■ JUDI 関西国際セミナー 1997 inイタリア

(発表者:難波健)

1997年にJUDI関西のメンバーで行われた、イタリアでの国際セミナーの報告。メルカテルロ・スル・メタウロ-MERCATELLO SUL METAURO- メルカテルロ市で行われたセミナーの発表。テーマはイタリアの田舎まちのまちづくりと風景づくり、まちをつくる歴史の重さ、計画が支える生活。



メルカテルロ市でのセミナー



セミナーのあとでの交流パーティ

■ JUDI 関西国際セミナー 1999 inブラジル

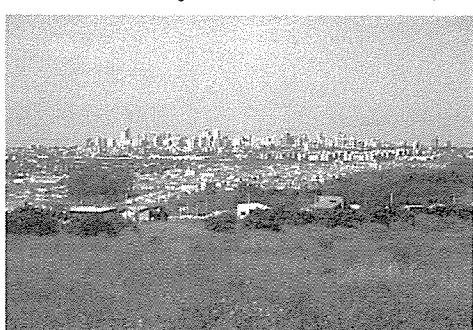
(発表者:角野幸博)

1999年にJUDI関西のメンバーで行われた、ブラジルでの国際セミナーの報告。ロンドリーナ州立大学 ウンベルト・ヤマキ教授から、震災を踏まえた日本の新しいまちづくりについて、ブラジルでセミナーを行いませんかという要請があり、JUDI関西の10人のメンバーが各々の日程に合わせて7月29日にブラジルパラナ州のロンドリーナで行われたフォーラムを中心に、興味の対象に合わせてブラジルの7つの都市を廻った。JUDI-IBA(ブラジル建築家協会)セミナーは、ブラジル日系研究者協会のイベントでの鳴海氏の講演に併せたこともあり、会場も参加者も充実してなかなか盛会で、終了後に学生が設計思想について意見を求める場面もあった。

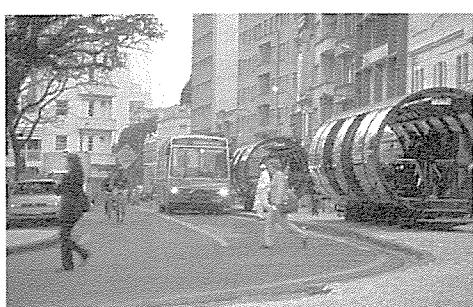
人口約50万のロンドリーナ市はパラナ州第二の都市、南部3州の中でも経済的な先進地域であるパラナ州北部の中心都市として発達。市の名前は小ロンドンという意味。英国の影響を強く受けている。多数の日系人が住んでいる。州立ロンドリーナ大学は総合大学としてかなりの名門。



JUDI - IBAセミナーのポスター



セミナーの行われたロンドリーナ市



環境都市として注目を集めるクリチバ



セミナーの様子が地元紙に取り上げられた記事

■関東ブロック

高見 公雄

TAKAMI KIMIO

関東ブロック幹事

株)日本都市総合研究所

◇(第7回)企業城下町日立の未来を占う

シリーズとして関東各県を巡るキャラバンを実施中です。第7回は茨城県へお邪魔します。産業都市日立の成り立ち、隆盛、そして今日へと、産業を軸に歩んで来た日立市の現状を都市デザインの観点から見つめてみます。当日は、日立市のご協力を得て、ご案内等頂く予定です。また、地元茨城大学より、山形先生に参加頂く予定です。遠方なので、朝が早いですが、東京駅付近に集合、貸切りバスで日立市を往復します。バスに乗ってしまえば楽々行けますので、ふるってご参加下さい。

■日時：2004年10月23日（土）

午前7時50分集合、午後21時頃解散

■移動手段：貸切バスにて日立市まで往復。

東京駅北口集合、解散。

■視察概要

8時 東京駅出発

10時30分 日立市着。以下を見学予定

- ・日立新都市広場、シビックセンター
- ・小平記念館（日立製作所、世界発のモーター等）
- ・中心商店街（銀座通り、よって家、金馬社パチンコ店=妹島和世）
- ・日鉄記念館（日立鉄山跡地、大煙突等）
- ・吉田正音楽記念館=内井昭蔵

14時30分 日立市まちづくり説明

意見交換会：「企業城下町日立の将来」

16時30分 懇親会

18時 日立市出発

20時30分 東京駅到着

■参加費

会員 参加費（バス代等）：2,000円

（非会員は+1,000円）

昼食代：各自、懇親会費：別途実費を徴収

■申込先、定員：

高見まで、メールまたはファックスにてお願いします。

バス1台のチャーターですので、先着40名とさせて頂きます。

株)日本都市総合研究所 高見公雄

FAX：03-3230-3408

e-mail : takami@nihon-toshi.co.jp

事務局より

1. 新会員の紹介

2004年5月1日～6月30日の入会者は下記の通りです。(入会順、敬称略)

6月30日現在の会員数は、490名です。

正会員氏名	勤務先(プロック)
田中 寿明	(株)シビテック(北海道)
藤本 治	OSM-Architects(関西)
小島 令治	積水樹脂(株)(関西)

準会員	勤務先(プロック)
後藤 良子	(株)UG都市建築(関東)

学生会員	学校名(プロック)
秋田 裕子	高知工科大学大学院(四国)
和泉 利枝	高知工科大学大学院(四国)
猪野 るみ	高知工科大学(四国)
北 沙耶香	高知工科大学大学院(四国)
宗円 彩可	高知工科大学(四国)

2. 退会者(2004年5～6月)

柏原幸雄、菊竹清文、木村弘、菅原桂子、辻本一英、徳永明、中塩愛子、三浦裕二、溝渕博彦(敬称略)

3. 住所変更等(敬称略)

氏名	変更内容(新)
佐藤 和裕	〒277-0023 千葉県柏市中央1-3-20 Tel. 04-7167-1800
中村豊四郎	アール・イー・アイ(株) 〒150-0022 東京都渋谷区恵比寿南3-3-6-101 Tel. 03-3716-2211 Fax. 3716-2202

編集後記

出雲地方は私のルーツであり、神話の国である。これが、どのように現代の都市環境デザインに関わってくるのだろうかということが、今回の特集に当たってのはじめの一歩であった。

特集を担当した JUDI 山陰のメンバーの共通認識は、出雲地方が古くから開け、神話に登場した背景に、環日本海文化圏の形成、川からの砂鉄による鉄器の生産、水耕による農業生産力、舟運など、“水”が重要な要素であったとみている。そこで今回の特集では、斐伊川、宍道湖、中の海、日本海といった“水”をキーワードとすることが決まった。

“水”を主題とした都市環境デザインは、全国多くのところで試みられている。今回の特集に当たっては、単に水を景観要素としてみるのではなく、切り口を変えて“生きた水の環境づくりを考える”ところから始んでいる。

生活様式の変化、産業の転換などにより、元々の水環境を保ってきた背景は失われているが、ここでは、新しく知恵と工夫により、一過性でない、持続可能な水を主題とした風土景観をつくろうという試みが述べられている。

古代から近世に続く原風景の上に、現在から未来へ向けて、生活と密着させながら生きた環境を創造しようという取り組みであり、それは私のイメージする「素箋鳴尊による八岐大蛇退治」、「大国主命の国譲り」など神話の中の世界を甦らせるものもある。

そして、このような出雲地方にだけある個性を持ったまちづくりは、きっと、これから日本の日本において独特の輝きを持ったものとなると確信した。

最後に、JUDI 山陰のメンバーは4名にすぎないが、それぞれの場面で、多くの仲間をつのりながら、地球環境、地球市民という新しい課題を踏まえ、着実に進んでいることに拍手を送りたい。

(社会空間研究所 錦織英二郎)

松江・出雲で特集を組むことになり、すぐに思いついたのが、事務所の同僚錦織のルーツは出雲のはず、ということで、彼に岡山に行つてもらいました。岡山から帰ってきた時には、既に特集の中身が固まっているという早業でした。JUDI 山陰のメンバーの行動力には脱帽です。そんなわけで、本号の特集は、基本的に JUDI 山陰のメンバーの手によるものです。お疲れさまでした。

(沢木俊樹)

広報・出版委員会

澤木 俊樹	石崎 均
土田 旭	伊藤 光造
近田 玲子	加茂みどり
菅 孝能	河本 一行
中嶋 猛夫	森川 稔
櫻井 淳	横山あおい
松村みち子	吉田 慎悟
白濱 力	作山 康